

1972

大正十三年一月二十九日第三種郵便物認可
大正十三年十一月十日發行(每月一回十日發行)

永樂町人編輯



十一月號

【號九十六第】

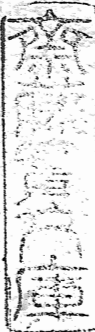
子菓用應實の松産山剛金

金	金	金	金	金	金	金	金	金	金	金
剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛
ほ	で	この	う	ぼ	柏	お	羊	煎	饅	山
し	ん	の	に	ん	子	こ	羹	餅	頭	飴
	ふ	あ			菓	し				
		た			<small>朝の實菓子式</small>	こ				

電話局本
番七二(番五七四)

店商屋龜

町本城京
目丁二



京城雜筆十一月號執筆者

(大體原稿到着順)

河内 山樂三	(朝鮮火災海上社長)	文明の匂とトマト	(二)
徳野 眞士	(朝鮮鑛業會主事)	書畫帳から	(三)
平井 熊三郎	(朝鮮勸業信託專務)	悲觀より活潑へ	(四)
小瀧 元司	(久原鑛業京城事務所長)	奇人松青庵	(五)
中村 健太郎	(朝鮮佛教會)	送迎のよしあし	(六)
岡田 恭藏	(京城中央電話局長)	電話漫筆	(七)
瀬戸 潔	(瀬戸病院長)	乗馬の話	(八)
平野 天桂	(桂門會)	南畫と文人畫	(九)
利根川清治郎	(朝鮮齒科醫師會副會長)	美人の話	(一〇)
砂田 辰一	(大阪毎日京城支局)	今村先生	(一一)
工藤 武城	(京城婦人病院長)	佛國文豪	(一二)
吉田 平次郎	(京城覆審法院部長)	大審院と接吻	(一三)
加藤 松林	(東洋畫家)	金剛山便り	(一四)
加藤 賢	(京城府衛生課長)	洋服論	(一五)
市村 毅	(總督府技師)	榻炭の獨語	(一六)
高木 背水	(西洋畫家)	美術工藝者の養成	(一八)
西本 量一		福澤先生の事	(一九)
丸山 鶴吉		浪人行	(二〇)
結城 次郎	(仁川吉岡酒造場支配人)	落書に閉口	(二二)
野崎 眞三	(朝新社會部長)	間島を觀て	(二三)
谷多 喜磨	(京城府尹)	月夜の卷狩	(二四)
坂上 滿壽雄	(滿鐵營業課)	茶代と心付	(二五)
今村 軔	(李王職庶務課長)	鼻を撫りて	(二六)
吉村 貫之	(木浦公立小學校長)	惡詩三章	(二七)
守屋 榮夫	(內務省社會局第二部長)	テームス河畔	(二八)
伊藤 龍	(朝鮮ホテル)	ホテル漫筆	(二九)
廣江 澤次郎	(奉天實業家)	煙草雜感	(三〇)
新貝 肇	(京城郵便局監督課長)	車上の論客	(三一)
梶原 峯治	(京城第一高女教諭)	指輪の話	(三二)
内田 竹三郎	(旭町銀月主人)	一位様の思ひ出	(三三)
名村 寅雄	(大阪毎日京城支局長)	本山翁の意氣	(三四)
青木 戒三	(總督府專賣局長)	煙草の話	(三五)
堀内 滿輔	(ちよぶや主人)	秋宵閑話	(三六)
岩本 武治	(阿波亭主人)	あわや亭日記	(三七)
山口 太兵衛	(商業銀行重役)	京城昔話	(三八)
高橋 章之助	(辯護士)	將棋道樂	(三九)
永樂 町人		讀史漫筆	(四〇)

(其の他社友數氏執筆)

子菓用應實の松産山剛金

金	金	金	金	金	金	金	金	金	金	金
剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛
ほ	で	この	う	ぼ	柏	お	羊	煎	饅	山
し	ん	の	に	ん	子	こ	羹	餅	頭	飴
	ふ	わた			菓	し				

電話局本
番七二(話電)
番五七四

店商屋龜

町本城京
目丁二

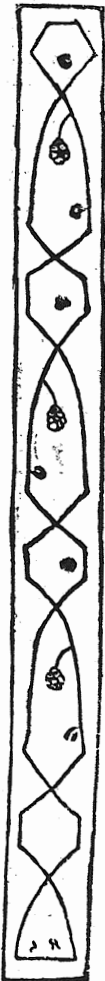


京城雜筆十一月號執筆者

(大體原稿到着順)

- | | | | |
|--------|--------------|----------|------|
| 河内 山樂三 | (朝鮮火災海上社長) | 文明の匂とトマト | (二) |
| 徳野 眞士 | (朝鮮鑛業會主事) | 書畫帳から | (三) |
| 平井 熊三郎 | (朝鮮勸業信託事務) | 悲觀より活躍へ | (四) |
| 小瀧 元司 | (久原鑛業京城事務所長) | 奇人松青庵 | (五) |
| 中村 健太郎 | (朝鮮佛教會) | 送迎のよしあし | (六) |
| 岡田 恭藏 | (京城中央電話局長) | 電話漫筆 | (七) |
| 瀬戸 潔 | (瀬戸病院長) | 乗馬の話 | (八) |
| 平野 天桂 | (桂門會) | 南畫と文人畫 | (九) |
| 利根川清治郎 | (朝鮮齒科醫師會副會長) | 美人の話 | (一〇) |
| 砂田 辰一 | (大阪毎日京城支局) | 今村先生 | (一一) |
| 工藤 武城 | (京城婦人病院長) | 佛國文豪 | (一二) |
| 吉田 平次郎 | (京城覆審法院部長) | 大審院と接吻 | (一三) |
| 加藤 松林 | (東洋畫家) | 金剛山便り | (一四) |
| 加藤 賢 | (京城府衛生課長) | 洋服論 | (一五) |
| 市村 毅 | (總督府技師) | 褐笈の獨語 | (一六) |
| 高木 背水 | (西洋畫家) | 美術工藝者の養成 | (一八) |
| 西本 量一 | | 福澤先生の事 | (一九) |
| 丸山 鶴吉 | | 浪人行 | (二〇) |
| 結城 次郎 | (仁川吉岡酒造場支配人) | 落書に閉口 | (二二) |
| 野崎 眞三 | (朝新社會部長) | 間島を觀て | (二三) |
| 谷多 喜磨 | (京城府尹) | 月夜の卷狩 | (二四) |
| 坂上 滿壽雄 | (滿鐵營業課) | 茶代と心付 | (二五) |
| 今村 軻 | (李王職庶務課長) | 鼻を撫りて | (二六) |
| 吉村 貫之 | (木浦公立小學校長) | 惡詩三章 | (二七) |
| 守屋 榮夫 | (内務省社會局第二部長) | テームス河畔 | (二八) |
| 伊藤 龍 | (朝鮮ホテル) | ホテル漫筆 | (二九) |
| 廣江 澤次郎 | (奉天實業家) | 煙草雜感 | (三〇) |
| 新貝 肇 | (京城郵便局監督課長) | 車上の論客 | (三一) |
| 梶原 峯治 | (京城第一高女教諭) | 指輪の話 | (三二) |
| 内田 竹三郎 | (旭町銀月主人) | 一位様の思ひ出 | (三三) |
| 名村 寅雄 | (大阪毎日京城支局長) | 本山翁の意氣 | (三四) |
| 青木 戒三 | (總督府專賣局長) | 煙草の話 | (三五) |
| 堀内 滿輔 | (ぢんばや主人) | 秋宵閑話 | (三六) |
| 岩本 武治 | (阿波亭主人) | あわや亭日記 | (三七) |
| 山口 太兵衛 | (商業銀行重役) | 京城昔話 | (三八) |
| 高橋 章之助 | (辯護士) | 將棋道樂 | (三九) |
| 永樂 町人 | | 讀史漫筆 | (四〇) |

(其他社友數氏執筆)



文明の匂とトマト

朝鮮火災海上
保険株式會社

河内山樂三

ことである、これからますます文明開化の頭をたゞいて、お手のもの、女體を擴張して、一層野郎どもを尻に敷くことであらう、アナー恐ろしの世の中である。

◇ 雜筆社から何か書けとおつしやる、なにも書くことがない、たま／＼トマトを見付け、カビの生へた思出を其のまゝに。

◇

今ははや三十年餘も、昔のことである、瀬戸内海航行の小汽船に便乗した、乗込むがイナヤ異様の臭氣が鼻を衝いて来る、それは機械油の焦付くのとペンキの臭であつた、とかうする内船は荷役をすまし錨を抜いて港外に出た、折から多少の風波が加はつて居たので、汽罐の噪音、船體の振動が、異様な臭氣とこんがらがつて心身を襲ひ、とても不快の念に耐へられぬ未だ曾て経験したこともない船體をも催しかねまじい羽目に立至つた、これではならぬと懊惱の擧句須らく心機を一轉させ此瀬戸際を乗り切らんと工夫をこらし始めた考へて居る内にやつと此臭氣が文明の匂とでも云ふのではあるまいかと思ひ付いた、外でもない、文明進歩のお蔭で、小さいながら此船全體がペンキで塗りつゞざれ、機械油の焦付くのは臭いに相違ないが、これあるが爲めに従前十日の航程も、僅か一日で達し得るのであると、かやうに觀念して見ると、どうかかうか耐へられぬこと

もなくなつて、襲ひかけた船體もトニカク防禦することが出来た、其の後もこんな雰圍氣に入ると、何時も同じことを繰返し馴らして見たので、今では別段耐へきれぬ臭とも思はない。

◇

丁度其頃には、筆者等の田舎では丁番が敢て珍らしくもなかつたがそのせいでもあつたらう、斷髮令發布當時に流行たものらしい『ジヤングリ頭をたゞいて見れば文明開化の音がする』と云ふ俗語が残つて居て、しば／＼聽かされたものである、爾來幾春秋はや内地では行者でもよなければ、結髮したものは見當らない、頑固な朝鮮の老人たちにも日に月に散髮が多くなつて行く、恐らくそれだけ文明が普及したのであらう、結構なことである、ところが此頃の若い人にはオールバックとか云ふ、前からは見るに由井の正雪の再來かと思まがうばかりの髪形が流行り出した、之も文化の向上であらう、しかしまさか一步進んで否退いて、結髮を讚美するやうな氣紛者が飛び出して、文化を逆襲さすやうなことはよもあるまい、かと思ふとアメリカあたりのあはずれ娘の間には斷髮が流行つて居ると云ふ

◇

筆者は元來茄子が好物である、しかし生で喰つたことがないから比較にはならないが、俗に西洋茄子と云ふトマトは、其の色合とあをくさい香を餘り感心せぬので、ついぞ口にしたことがなかつた、ところが或る時知人から、當世トマトを喰はぬとは、バンカラも甚だしいと、到底濟度の途もないやうに嗤はれた、考へて見ると、和食では刺身のツマにも、味噌汁の中身にもトマトを見出すことはないが、洋食では季節によると一食に二度も三度もお目にかかるのであるから、もつともな話であると首肯せざるを得ない、バンカラと嗤はれる事は、毛頭悔しくもなければ悲しくもないが、トマトを喰はぬと云ふこと其のことが、いかに文明に遅れ時代から落伍するやうな氣がするので、無理に喰い馴らして見た、元より今でも好物ではない、しかしサラダの中に入れて居ても、わざ／＼忌避するには及ばぬだけにヤツト修業を積んだ

◇

ア、文明と云ふものに追付き、文化に置き去りにされぬ爲めには、嫌な臭いにもなじみ好かぬ味にも親しまねばならぬ、なみ大抵の努力ではない、一日でもよいから神代太平の民になつて見たい氣がする。

書畫帖から

朝鮮鑛業會主事

徳野眞士

×

私の宅に二三冊の書畫帖がある。それは私が學生時代に、せめて先生の筆蹟だけ集めて置きたいと云ふ考から始めたのであつたが、或る日二三度會つた事のある、江木衷博士の門前を通りかゝつて、欣々女史でも居れば尙都合がよいとつい寄つて見る氣になり、つかつかと支關に訪れて一筆を振つてもらつた。

×

江木博士は、至理平而凡冷灰題とやつて、落款も冠冒も押して呉れた。それを一見すると、文字も下手な博士連よりもよく、印なき押して馬鹿に体裁がよいので、これは面白い、少し校外の名士にも書いて貰ひませうと、夫れからといふものは、私は外出する時には、必ず此書畫帳を懐中する事にした

×

高遠な理想と遠大な抱負を持つて居つた學生時代の事であるから、大臣だらうが博士だらうが、面識があらうがあるまいが、そんな事には一切頓着なく、知名な人の門札を見ると、向ふ見ずに飛び込んで、一寸一筆と出掛けたものである。だから私の書畫帖には、大臣の古手も居れば浪人も居る、學者宗教家政治家軍人文士何んでも居る。従つて相當知名な人も多いが左程でない連中も可成りにある。

×

京城で書の先生をやつて居る雲耶山人は、私の此の書畫帖を天下の珍品だと稱して居る。何しろ惡筆の展覽會で、書として見られるのは、犬養木堂、島田沼南外二三氏で、他は逆も一人前の書ではない他人の書帖などに、書く柄でない連中の書が集つて居るから、正に珍中の珍だと、自分の事のやうに喜んで居る。

×

勿論之れを集めるには、色々な失敗もあれば意外の成功もある。或時、海軍の瓜生將軍と間違へて實業家の瓜生震氏の門を叩いた事もあつた。又島田三郎氏の所から歸途、今では新しい評論家として賣り出し居る室伏高信君と東郷大將を訪問して留守を使はれた事もあつた。ほんとうに留守の所や居つても斷はる人もあつたが、斷はられたつて只だから、私の方では別に腹も立てずに、さつさと次ぎの名士を訪問するといふ風にして居つた。

×

犬養木堂に會つたのは、神田の青年會館の樂屋で、此時は今は代議士になつて居る、早稲田の栗山博士がわざ／＼紹介して呉れた。何しろ當時の東京は國民黨の天下で各大學の學生は丁未俱樂部を組織して、國民黨を應援して居つたから、吾々學生は可成り持つたものである。當夜も國民黨の政見發表

演説會があつたので、鶴崎鸞城氏が演題のピラ等を書いて居つた、犬養氏には、私は特に敬意を表して、第二冊目の新しい帖を出して巻頭に所望した。氏はあり合せの禿筆に墨を含ませて、天眞爛漫木堂毅とやつた。之れはなかくの上出来で、私も折角来た甲斐があつたと喜んだ次第である。

×

所が、第一冊目の古い帖に、其處に居合せた佐々木照山、藏原惟郭古島一雄、小林源藏、村松恒一郎の諸代議士や、院外團の田中舍身鶴崎鸞城、斯波貞吉などの連中が、勝手氣儘にぬたくり合つて、わい／＼と笑ひ興じて居る。犬養御大もまた其の方に行つて、何んだ、佐々木も田中も坊主らしい事を書いて居るね、どれ／＼も一つ書いてやらうと、與天地同心、是朱子之言也、犬養毅と書いた。私は魯弱な學費の中から、榛原で一番安いのを買つて来た位だから、同一人に二ヶ所も書かれる事は斷なからず不平であつた。だからすぐ其帖の前の方にある、與天地合其徳といふ語を示して、之れと同じですと、いやな顔をしてやつた。しかし今になると、彼の時にもつと澤山書いて貰へばよかつた時を思ひ出しては後悔する。

×

それでも翌日は牛込の犬養邸に印を貰ひに行つた。其歸途夏目漱石氏を訪問して無理矢理に書いて貰つた。此書畫帖は東京で二冊だけ埋まり、三冊目は濹澤さん外五人許りで、あとは餘白のまま朝鮮に來て、天草神來其他の有名無名の書家や畫家が埋めてしまつた。それ限り私は書畫帖を持ち廻る事をやめてもう十年になる。

悲觀より活躍へ

朝鮮勸業
信託事務
平井熊三郎

【四】

歐洲戰亂後に於ける財界の不振は世界的の其れであつた、獨り我帝國のみの不振でなかつたことは何人も知り抜いて居るのであるから

『今更之を繰返す』必要が無い、唯だ現下に當面した講究問題は、舉國一家的の緊張を以て大に奮勵すべき一事である。

國家經濟の整理は何うしても國民の努力と奮勵とに俟たねばならぬ戰亂後の歐洲は殆ど合議した様な歩調で『上下相一致』して國家の隆昌を圖つた、敗殘の獨逸が漸次進展して舉國一家的の意義ある活躍をしたのも、即ち苦き體験の結果だと言ひ得るだらう、退きて我帝國の趨勢如何を思へば一般の緊張が猶依然として緩んで居た、然かも虛榮の夢を覺醒することが甚だ遅かつた、詔勅の煥發が我々國民を深く戒め給ふたのも、以上の趨勢を軫念あらせられたのである山本内閣が舉國一致の急を叫んだのも此詔勅遵奉に外ならなかつた今ま加藤内閣の政綱に於て政費節減及一般國民の緊張を力説するに至つたのも亦同一の理由で、殊に最も急を要すべきことだと言ふのは、此時此機を誤らば國家の興敗に關する大切な場合だからであらう、吾人は政府當局の訓戒を俟つまでもなく『自覺的奮勵』に出づるのが當然であるのだ。

時勢を大觀せずに猶舊夢を負らんとする人々は、現内閣の政綱に對して批難を加へ剩へ悲觀者を多からしむる内閣だと罵倒して居る、尤も斯かることを言ふ人々は或る一部の誤解者で固より取るに足らないが、是等の批難や罵倒に惡化されて自縛自縛的の落伍者となる者も無いとは限らぬ、故に其の誤解者に向つて一應誨告する必要がある。

財政の整理は國家も一家も同一意義のもので、唯國家の大と一家の小とによりて異なるのだ、現内閣が絶對緊縮方針で大整理をするのは餘りに亂れ切つた財政の整理と、荒みに荒んだ國民を緊張させようとの深慮であることは何人も之を認むるだらう、既に然りとせば勝手な批難誤つた罵倒をするのは何等の價値が無い、一種の悲觀者は財政緊縮方針の爲めに不景氣の聲を大ならした様に誤つて萬事手控へて居る模樣が見ゆる、是等の悲觀者は詮する所臆病に權つたので悲觀すべからざる場合に悲觀する人々だ、現内閣の財政緊縮方針の奥に國家百年の計が在ることを知らないのだから、從來の如く外債を募つて迄奢侈生活を續けた所で其終りは破損を餘儀なくするのだ一體歐洲戰亂の前後に僅かな金が入つたとしても、其れに安心して奢侈に流れ惡風俗に捉はれ我れが

ら破滅へ進んだのが愚なことであつた、斯く解釋したなら現閣の財政緊縮方針は寧ろ歡迎さるべき鐵案であらう、然るに未だ其の悟りに出でずして惰性を捨つるの元氣なきは何の爲めであるか、我々は經濟界に干與して居る關係上常に絶えず緊張努力を忘れない、現閣の財政緊縮方針に向つても別に驚異も感ぜぬ、無論悲觀も樂觀もせずして活動を續けて居る。

我朝鮮の經濟界が順調であるとは言はれ無いが敢て悲觀するにも及ぶまいと思ふ、即ち悲觀の聲が八方に起つて居るとしても之を樂觀へ移すべく努力し奮勵すれば宜いのだ、艱難が加はれば加はつた丈け倍加の勇氣を出せば、必ずや局面の展開を見て悲觀が樂觀に變ずるのである。

我總督府も兩政整理の影響で思ひ切つた整理をするらしいが、整理問題は單なる整理問題として『悲觀の淵に臨んだ一般』に對しては活躍すべき動氣を與へねばなるまい、之に就ては多く語るを避けて官民提携した意義ある活躍を切望したいのである。

森署長の事

平田久雄

鍾路署長の森さんが、前號に『米のなる木』を書いた▲處で、森さんに言はせると、『劍道なら兎に角、筆道で僕をせめるのは慘酷だよ』とある▲それほど同氏は、竹刀を持つては、うでに覺へのある古兵▲感服するのは平常の氏の信條だ、曰く『僕はいつも巡查部長だ、イヤ昔も今も一巡查部長として働くのぢや……』

奇 人 松 青 庵

久原鑛業
京城事務所

小 瀧 元 司

明治廿八年私は藤田組の小坂鑛山に厄介になつて居た時でした、知人の紹介で給仕を使つて呉れとの事故丁度一人欲しい時でしたから兎も角會つて見る事にしました、

處が其青年は松坂と云ふ車屋の息子で宇吉と云つて年は慥か十七であつたと記憶して居ます、日蔭の『もやし』の様にヒヨロ／＼丈の高い男で歩くにも前にかがみ一見して常人と變つて居ましたから一兩日考へて見ることにしました

が何分熱心に懇願されまして試験的に使つて見ることにしました、當時私共は湯式製練の試験をやつて居た時分でしたから給仕の傍ら薬液の調劑を習はせました處が中々敏捷で己に一年以上の先輩も舌を巻く程でしたから之れは堀出しものを見付けたから段々分拆を習はせ、將來は分拆師として飯を喰ふ位に充分だと同僚とも相談して喜んで居ました、其頃小坂では發句が馬鹿に流行し猫も杓子も發句をやつていろ／＼の名の下に句會がありました、私共も其仲間でした

が今でこそ白狀致しますが夜勤の閑の時などボール板に出駄羅目を書いて喜んだものでした、處が其年の晩秋初雪の時でした給仕の宇吉が私も發句をやつて見ましたと書いて來ましたから見て見ましたら初雪に迷ふや塵の捨てどころとありますから之は何處からか盗んだ句だろうと責めましたら決してそうではありません、自分は今朝

家で掃除して塵を捨てに戸外に出た處が何處も皆奇麗で暫く迷ひましたから皆さんの發句を眞似て作りましたとのことでしたからいろ／＼調べて見ましたが似寄りの句がある様でしたが同じものが見當りません又松坂の家に發句の書籍もある筈なく妙な男だと評して居りましたが其後時々書て來るのを見ると、拙も私仲間及びも付かぬ句許りで今記憶して居ませんが知つてる二三を細紹介すれば

露凍る葉裏に秋の螢かな
飛上るひばりや春の力丈付
茲に來て置き處なきころ哉
などでした、何しろ日に／＼進歩しまして終に觀風雜誌、風光雜誌等に投書するようになり初めは佳作のみでしたが五六箇月の後には五客に入り一年程の後には大抵は天地人をとり全國何萬句中より拔萃されたりして居ましたが、とう／＼彼が十八才の時其角堂主人から松青庵號を送られ、雅號も又礁波と命名されました、此時は己に

鳴鶴先生の手本を習ひ長歩の進歩にて吾々ボンクラを驚倒させました又種々の講議録をとり、知人よりは書物を借り受け一生懸命勉強して居ました、こう云ふ風で風交社などでは松坂は餘程の老人で從來俳句を公にせざりしものと認め始終老人を遇する的手紙なり發句なりが參りまして大笑致しましたそして又半年ならずして陸中蕉風吟社々長に推薦され毎回の雜誌

には參頭第一に松坂礁波先生作として大書さるゝ事になり野津將軍杉聽雨先生より御自筆の書を贈られ其角堂主人は素より發句黨乃至文人墨客より書畫續々贈與され同時に發句の交換を申込まれて居ました(私も柳搗先生の山水畫を分けて貰ひました呵々)其當時又加賀某宗匠(名を忘れましたが)の令嬢追悼句會の時なども左の句を送り全國の蕉風黨より非常の喝采を受けました。

散りぬるを聞くだにうきを花の主
こんな風で給仕をやつて居られなくなり各地の新聞雜誌に發句を掲げぶら／＼して居ましたけれども何がさて家は豊かでなし風流三昧で暮されぬのに何處でも宗匠扱ひをされとう／＼やり切れなくなつて惜いことには税關官吏の登用試験を受け函館の税關吏となつて居ました

が何かの都合でそれも罷めた筈でしたが私は國を去たので殘念乍ら其後の消息を知りませんが多分今頃は不相變隱れたる宗匠をやつて居るかと思ひます。

◆小瀧氏の事

平田 久 雄

久原鑛業の小瀧さんが、本號に『奇人松青庵』を書かれた▲處で、どつちかと言ふと、その小瀧氏も奇人傳中の人で、朝からお酒は好き、寫眞が好き、詩が好き、歌が好き、先づ風流三昧で送つて居られるが、不思議と再務のアタマが正確、それに大體に通ずるの明があり、何んでもあの社になくて叶はぬ人物だとは、之も亦た一奇といつて宜からう。

送迎のよしあし

朝鮮佛教會 中村健太郎

◎送迎がよいか、悪いとかいふことは、随分世間で八釜しく唱へらるゝ問題である。

◎成る程送迎には、第一時間がかゝつて、其れに伴ふ経費も、決して少いと云はれない。大概の人は、京城驛前まで、電車を利用する。それに往復十錢を要する。外に入場券が十錢であるから、何としても一度の送迎に二十錢を費さねばならぬ。

◎それに午前の九時から十時半頃(京釜線の場合)までの時間を費さねばならぬ。それも一度や二度位なら、大した影響もないが、一年間も積れば決して小額とは云はれない。

◎東京あたりのことを考へると、京城の送迎は全く多い。東京では内閣總理大臣が旅行するからとて關係官廳の高官と警視總監や新聞記者位である。東京の人が、京城の送迎を見て驚くのも無理はない。◎先般總督府高等官の更迭の行はれた時、東京から来た某氏は、京城驛頭に降り立ち其の送迎の盛んなのに驚いたものか、頻りに『餘り仰々しいではないか』と罵倒して居つた。

◎下岡政務總監も、成るべく送迎を簡便にするやう内示されたやうに傳へられ、一時は送迎も随分なくなつたやうに聞いて居つたが、最近京城驛頭に往つて見ると、餘り減じたやうには思はれぬ。

◎吾々位、京城驛を踏むものも少

からう。月に十數回は、例月のことで、時によると數十回に登ることがある。費用と、時間と勞苦とを計算したならば、此れ位詰りぬことはあるまい。こんなことを東京人に聞かせたら、頭から罵倒されるに違いない。

◎然も吾々は、京城驛頭の送迎を或る程度まで必要とし、賛成せねばならぬ。其の理由は、京城の如き民衆的社交俱樂部のない處には驛頭の送迎が、一種の俱樂部となるのである。

◎京城には、部分的には、俱樂部

もあれば、集會もある。訪問も出来る。然し京城全體に亘つて、殊に内鮮人が一緒になつて、集會する機會といふものは、容易でない随つて疎遠に打過ぎることが多い。◎それで、吾々は、他の者は別として、總督と政務總監の送迎だけは、盛にしたいと思ふ。全京城の各種の方面の代表的人物が、此機會を利用して、京城驛頭に集り、簡単な要務を立話の間に解決することが出来れば、これ程よい機會はないのである。

◎此の意味に於て、私は普通の送迎は、出来るだけ略することを賛成するが、其の立場と事情によりては、穴勝これを虚禮として排斥する必要はない。寧ろ各方面の人士と共に、此機會を活用したいと思ふ。

◆平壤行十首

足立丈次郎

秋の夜汽車にて平壤に行き、翌日夕歸城す、往復歌吟十首

夜汽車に乗りて

此頃の沈みはてたる世のさまも
見えて寂しき夜汽車の旅路
深夜平壤に入る

プラタナス繁れる樹かけ街燈の
またよきさびし平壤の夜半
翌朝晴空に平壤飛行隊の飛行
機群飛するを見て

きら／＼と翔かへして晴れ渡る
空を飛びかう飛行機の群
平壤にて

今もなほものゝあはれをとよめ
けりひととせ前の洪水の跡

同

落ちし壁破れし窓もそのまゝに
秋風寒き平壤の街

歸途

時のまにむら雲わきてひとしき
り汽車の窓つつ秋雨すさまじ

黄州にて

雲の上夕日照りそふいは山は天
柱山かそれかあらぬか

同

紅玉か俊錦か累々と華果みのれ
り枝もたわ／＼に

沙里院を過ぎて

廣野原むらさめすきておき渡す
くさ葉の露に夕陽か／＼やく

同

秋の日の喜れのこりたる蕎麥畑
を白き賤の夫牛曳きて行く

電話漫筆

京城中央
電話局長 岡田 恭藏

◇無くて七癖有れば何やら謂ふ人さまざまの癖、電話を掛ける時にも當然現はれて來なくてはならぬ◇受話器を外すや否や交換者の應答も待たずに、直ちに轉換器を氣忙はしげに上下して、交換者に應答の隙を與へぬ癖を持つた人、番號の呼び方でも

『アア、モシ／＼何局何番』
このアア、モシ／＼を必ずやらねば何局何番がスラリと言へぬ人、殊に御婦人方に多いのは、

『アノ……モシ／＼……アノ……モシ／＼……アノ……エート』
……何局ノネ……アア……何番』
この位になると一寸首をひねらざるを得なくなつてくる。何故かとなれば、この間交換者がいくら忙がしい中でも手を空けて待つて居なければならず、其の爲めに他の使用者にそれだけ御迷惑を掛けもやうになるからである。

◇これは亦よく途上で見掛ける例であるが、卓上電話機の送受話器を高く頭上に懸して盛んに大きな聲で怒鳴つて居る方がある。これでは電話が充分に通じない。

◇元來御當地の電話機はソリッドバック型と申して送話口に接近して話さなければ送話の効力が薄いものである。この送話器の特徴は

通話の明瞭といふ事であつて、其の正しい使用方は送話口に充分接近せねばならぬのである。こうした文明の利器も使用法を誤つては一向其の効力を現はさない。下世話に馬鹿と鉄は使ひやうと申しますが、電話も使ひやうで良くも悪くもなります。

◇電話を相當掛けた方でも尙且時にこれである、況んや馴れない方になると。

番號のみで局名を言はぬ
何番何局と逆に呼ぶ

中には最初何局と呼んだばかりで再度交換者が『何番へ』と問返さぬと、どうしても番號を言はぬといふ癖を持つた人もある。

◇これ等の様々な呼び聲を交換者が忙がしい仕事の中から判断して適當に處理して行くことは、職務柄當然のこととは謂へ同情に値するものと考へる。

◇近頃の統計によつても使用者の番號呼稱不良といふものが、三日間の調査で百分中三九、八といふ數字を示して居る。それだけ使用者それ自身で通信能率を落して居ることになる。

◇一體當地で使用して居る共電式電話は、局内では共同作業と申して各員が一致協力互に足らざるを補ふて相援け合ふといふ特徴があり此の美しい共同精神のもとに行はれて居るのであるが、勝手ながら私はこの意味をモット／＼擴張

して之を社會的共同作業の名に委したいのである。

◇電話事業と謂ふものは其の都市の文明を量る計量器である。故に社會の福利増進の爲め私は世を擧げて其の愛護に努めて頂きたいと願ふのである。

◇然らば電話の社會的共同作業とは如何かと申しますと、そこに幾分の議論も生れて來ませうが私は第一、電話交換取扱の敏速にして正確であること

第二、電話線路機械の設備の完全であること

第三、電話を使用される方々の理解ある上手な使ひ方

以上の三條件に含まれると考へるのである。

◇局と加入者との關係は決してそれを連結した電線の如く細いものではない、交換作業が眼に見えぬばこそ其處に誤解も疑惑も起りませうが、私共當事者は使用者と相倚り相援け合ふて益々斯業の改善に努力して行きたいと思ふのであります。

◆京電の標語

平田久雄

京電會社では、重役室を始め各室に、節約の標語を掲げて居るが、簡にして明、頗る要領を得て居るといふので、訪問者間でも評判である▲殊に『ペン先一本いくら、鉛筆一本いくら、半紙一枚いくら』……と頗る綿密な表まで作つて最後に『節約は、國の爲め身の爲め、社の爲め』などは仲々あちである、筆者の名前を聴きたいものだ。

乗馬の話

瀬戸病院長

瀬戸

潔

運 動

運動の目的は保健である、單に機械的に四肢を動かすことが體操にならない例へ其四肢を動かす法が其法に従ふても好んで進んで熱心にやるのと嫌々ながらやるのでは吾々の肉體に作用し方が非常に差があることは既知の事である。

そこで吾々の保健の目的たる運動は常に必ず爽快な気分を伴はなければ不可である、だから不愉快の運動は單に身神を消耗する勞動である、反對に普通勞動者のやる作業でも趣味を持つてやれば吾々の身神を鍛える運動となるのである猶競技の如きは其運動の發達を計る手段であるが競技に熱中し過ぎて身心の過勞を來す如きは目的と手段とを誤まつたものだ。

運動の目的たる保健上清潔な空気とか日光とか食物とかは勿論運動家として注意すべきだ。そうすると日光を浴び外氣に觸れる快活な運動と云ふと野外の凡ての運動が何でも宜しいことは云ふ迄もないが競争を伴ふものは心身を過勞して其手段のため盲目となり却つて保健上有害なものとなり易い茲に於てか乗馬を諸君に勧むる所以だ乗馬は相手なしにもやれば相手があつても邪魔にもならない壯年のものにも老人小供婦人にも其體格の強弱に關らず自分勝手に其分に應じてやれる處は實に理想的の

運動だ。

諸君の誰かど危険を伴ふから宜しくないなど云ふのは全く馬術を知らない連中の話だ、法に従つてやれば決して落馬などは少しも恐ろしいものでない、昔の乗馬隊で無茶苦茶な教育した時代でも落馬の怪我などは極めて少ないものだ、況んや紳士連が法に従ふてやる練習等では決して怪我などはないことを保證する。但し生意氣に一寸乗れる人が自分の腕を過信して無暗なことをすれば怪我ないと限らないことは勿論だ。

趣味の乗馬

馬には乗つて見ろ、人には添ふて見ろで馬に乗り初めは新婚當時以上の面白味があり、其堂に入るに至れば老夫婦以上に離れ難くなる乗馬黨が途中でやめるのは其堂に至らずして天狗になる時である。春夏の早朝の乗馬などは市中を散歩しただけでも充分の満足を得られる、若し一二時間の閑暇があれば郊外に野外騎乗をやる、清涼里の朝靄に蹄を響かして松林の小川に水飼で歸つた時の朝食の美味なこと。

夏の日盛り漢江に水馬の練習、馬は其騎手に頼りセッセと遊ぶ、騎手は勵聲乗馬を導く、人馬共に疲れた時に上陸して木瓜を割る、其皮の部分は馬が最も好んで食べる其夜の安眠の心地よき暑いくと

寝付けない人々に御氣の毒である秋の遠乗は云はずもがなで肥馬に鞭でば驢馬位は朝飯前である、月明の野外騎乗など馬に乗らぬ人に話しても解るまい。

冬の氷點下何十度となれば乗馬連も閉口するだらうと聞かれるが何のく鬚髯はおろか眠迄も凍る即ち白霜不在生牛背の節は馬は最も元氣だ、氷上蹄鐵を打てば何處迄も行ける、市中郊外を驅廻れば人馬共に汗になる、勇壯なことはオンドロに鼻水でも流して居る人々が馬鹿くしい。

寒稽古前後のストーブ會議に至りては天機洩すべからずである。

若し稍々上達して調教が出来る様になれば愉快な事は他に類がないちつぽけな狎が二三の藝をやるのでも恐ろしく諸君が可愛がつてる

◆紅

加藤 勝子

海のきはあなたに落ちし夕日影ほのほにまがふ紅のいろ
平野 迂禪
人の世を呪ふと見ゆれ紅の野火ものすこく風になびきて

あの巨軀を以て吾々の命に従ふて兩膝を折りて御辭儀をしたり棒立になつたり碁盤乗りをやる三本足で歩いたり馳けたりピヤノに合せて踊る様にもなるんですよ。それかと思ふと五六尺の塀を飛越したり二三間もある溝を苦もなく飛んだりします、それで居て一度騎手が下馬すれば従順なること猫の様になります。どうです諸君も一つ乗つて見ませんか。

南畫と文人畫

桂門會 平野天桂

◎文人畫の輕妙なる筆致、文人畫の放膽なる趣構或は潑墨淋漓たるもの、布置非凡のものなど風雅にして簡素なる畫味は風流者輩の喜ぶ處である、そこで其餘は諸方に及ぼし、文人好み床飾りとか、茶道では文人手前、花道では文人活け、などともてはやさるゝ様になりました。

◎文人畫の濫觴とも申すべきは、南畫家の大雅堂無名並に其一派の人であります、北畫の方でも蕭白(曾我氏)など自ら文人畫を以て任じ、岸駒の畫を難じて、俗氣満々とさへ云ふたのです。

◎かゝる氣勢にて文人畫が生み出だされたる其時代の有様は如何かと云ふに、其當時狩野派、住吉派土佐派の畫匠が、畫所預とか法眼とか官位官職を迎へて技に勵まず丹青を翹塗するに過ぎずして筆意墨品を尊重せなかつたからで、即ち形式的なる畫に倦みたる人々は淡々として技に拘泥せぬ氣品高き精神的作品を欲する様になつたのです、かゝる経緯をもつた我國の文人畫は明治以前迄一方北畫の畫匠に對し、南畫より出でたる文人畫を以て對峙したのであります、斯やうに南畫の名家に文人の多かりしこと——その爲めに技を後とし、詩意を先とせる文人畫を作り出したる譯なれば、南畫の總てが文人畫であり、文人畫は南畫ばかりであるとは云ひ得ない。

◎維新以前は陰に陽に勤王を唱へ

たる人々は儒道を提唱して漢文漢詩漢文字を推奨したのである、詩書畫の名家として頼山陽、篠崎小竹、吉田松陰、貫名海屋、皆川淇園、梁川星巖、藤本鐵石、田能村竹田、など多士輩出し、各家文學を以て經世の大業を説きつゝ一面風韻ある畫を作して氣を養ふたのである、是れ即ち時人の尊重せる文人畫にして詩趣津々、簡筆の妙は到底筆技に汲々たる畫家輩の窺ひ得ざるの境を自由に描き出したのであります、大正の今日益々用ひらるゝの理由は其作家の名士でありし事なるは勿論なれど、而かも其筆致の高格なるによると申すべきであります。

の折衷畫などに飽きて淡々たる清味を樂しまんとするの趣味より出でたるに外ならないと思ひます。されば文人畫の氣品第一は南畫の生命であり、南畫の歸趨する所文人畫と一致するとも申されます。

◎實に南畫が其源を支那南方に發して世々文豪墨才を出し、法を法として苦心經營、後世に傳へられたるもので、筆法墨法あざまと凡百描法を畫くべしとしたるは、之れ士大夫の技と目さるゝ所以であります、泰西の人々も此南畫の辦法を一々説明して聞かせましたらば、其點及び線の用ひ方及び意志の表示方の巧妙なるに感心して居りましたかゝる堂々たる方法を有し而かも筆墨を末とし氣韻を先とする東洋純美術は吾人の誇りとせねばならぬと思ひます。近ごろ南畫を標榜しつゝ其古法に依らず、時代迎合を衣として黑白不分明の作が坊間に流布さるゝは歴史的名譽ある東方日出國人として、東洋君子國人として惜しい事と思ひます。

雁 鳴 く こ ろ

慶南金海 穎田島一二郎

◇ 朔時の稻がみのらぬ早續き今朝はしつとり雁がないてゐた
 ◇ うねうねと廻りまはつて此處迄は來たがつきないまの小道
 ◇ 飼猫が甘へて寢床に潜りこむ操つたい夜た半分變てゐて
 ◇ トマトはそんなに好きでなかつたが藥ださうでつい喰へなれた
 ◇ 妹をなくしてからの寂しさを今日もところろ觸觸がとる

美 貌 の 話

朝鮮齒科醫師會 副 會 長 利 根 川 清 治 郎

クレオパトラの鼻が美しいと言つても之を下女の鼻と交換したら變なものだ、お鍋さんはやつぱり例の團子鼻が美しい、美しいと云つて語弊があるなら調和して居ると言つても宜い、然し調和して居るものは、居ないものよりも美しいから結局『美しい』わけである。

田舎娘が手拭で姐さんかぶりをして髪を摘んで居るところや歌を唄いながら茶摘みをして居る姿なども美しい、美しいと言つて悪ければ野趣があるとでも言はう、然し其れがお祭の夜などの襟に赤い顔にお白粉を塗りたくつて華美な着物を著て田舎舞をまくし立て乍ら百鬼夜行のテイタラクで出沒されては、よほど悍猛な人種でない限り助けてくれと云ひ度くなる。

美の定義は六つかしいが、多くの場合或る對照が吾々の心の求むる或る傾向に一致した場合に起るものであるから調和も其の一つの條件である。

然かも調和は現代の人々に比較的缺けて居る條件ではあるまいか、流行を追ふ心の如きは美に對する觀念の缺乏を無言の裡に物語つて居る、同じ型質の人がないならば凡ての人に共通する美しい調度も決してあり得ない、従つて他の目的になら兎に角美しかるべき爲めにする流行は殆ど價値のないものである。

蛙も古池に飛び込んだからこそ淋しい美しさが浮んで來る、耳隱し

の御嬢さんを古地へ突き飛ばしてボチャンと音をさせた處で何の美があるものか。

皓齒とは古來美人の形容である、美人のことではない、或る齒磨の廣告に『齒牙を純白にし』云々など書いてあるのを見るが、事實齒の生れ付きの色から純白にするものとすれば是は決して有難い事ではない、顔色の白い、唇や齒齦の紅な若い人には白い齒も美しからう、然し色の黒い奴が眞白い齒を剃き出したり、爺さん嬢さんが白い齒を剃き出したのはあまりよい恰好ではあるまい。

と言ふものゝ中是れは美しいと感じた人が一人もなかつた、是れに反して西洋の女の美しいのには驚いた、然し一度日本に歸つて見ると、事實は是と反對に、日本に居る西洋の女に美しいと思ふ人が居ない事に氣が付くと同時に、日本の女の美しさを深刻に感じたと言つて居た。是れは至極尤な話で日本人にはやはり日本の風物に調和する様な風俗が出來て居るのであつて切り髪や洋服姿が如何に不調和であるかを物語るのである。よく夫婦揃いで散歩する方を見受けるが御主人は電信柱の様に細長く、奥さんは其顔迄もないのがある。こんなお方は揃つて歩るいては美でない、優生學の方面からなら多少の効果はあるが、仲よく胸を組んでの散歩は調和が取れぬ、所詮別々に歩く運命に餘儀なくされた人々であつて、誠に同情に堪えません。

京 城 み や び 會 詠 草

坪 内 孝 氏 選

- 籬 菊 平 野 迂 禪
- 夕日影あなたに落ちてうら庭の籬が下の菊のしろけき
- 同 江 藤 ま つ 子
- うつくしき籬となりぬ植なへし庭の野菊のさけるこのころ
- 同 山 田 花 江
- 吹く風もやゝ秋ばみてこの日ころまがきの菊も高くのびたり
- 道 中 島 桂 谷
- わだつみの廣きが中にゆきかひの船にも道のある世なりけり
- 同 工 藤 ゆ り 子
- 目もはるに大海原をわたり行く舟にも道のあるものときく
- 同 山 田 花 江
- 月あかりふさみかへれば今し來し道の白砂きらゝ光れる

今村先生

大阪毎日新聞
京城支局

砂田辰一

◇おつさん、なんて言ふては濟まないと思ふが、うぢとか、さんとかは、わが今村柄氏の呼稱にはその柄合ひとしく、つり合ひ兼ねる癖が多い、よつて、おつさんと呼ばせて貰はう。御免なさいよ。

◇或る夜さ、わたしは本ブラをやつてると、對いのとうさんの袴に白足袋につゝかけ草履（或は雪駄だつたかも知れない）の四十男が先方からやつて来る、京城の職人にしちや、馬鹿に小意氣だナと思つて、近づくまゝに見やると、なアーんだ今村のおつさんさ、顎骨が高いせいでその角刈りでない分けたあただが、角刈りに見へて、いよく職人視（無禮にも）したことを、おつさんと知つてから思ひついた。

◇おつさんとは時々會つが、妙にこの時の遭遇がわたしのあたまたにおつさんの諸相を印象つけた、荒削つりなおつさんの造作の中からアノ犀の眼のやうな眼は犬養木堂のそれと似てゐるが、木堂のよりはずいつと、はつきりしてゐる所に、マダおつさんの若さがある、顎骨の隆々たるは一偉觀であると共に、その特に隆起した顎骨から口唇のあたりへ一直線に急斜面をなしたあの平野の趣きが、いゝ愛嬌になつてゐる、上の前歯が二本一寸叛逆的に形成され、髪は疎らで剛はさうであるが白髪は少ないことと三つとそれごとを言ひあつ

てから反對に行き過ぎたが、ドウ考へて見てもおつさんを雲上人とは思へなかつた、このおつさんの宮仕へ位い面白いいものはないと思はず微笑した。

◇とうさんの著物に白足袋につゝかけ草履で本町をブラ付く——江戸前らしく出来たおつさんだ、木彫りの羅漢のやうなアノ顔は華奢な優男にもましてたしかに男性美だ、おつさんが自ら作題にする『年増藝妓』から想はれさうな格好だが、果してどうか知ら、八たんの丹前でも著せて長火鉢の前に『いーさん』で据へておくに持つて来いの人頃年頃ではあるまいか。

◇酸いも甘いも噛み別けたらしいおつさんだ、おつさんに息子どんでもあつて嫁でも取つたら、おつさんは餘程思ひやりのいゝ『親爺どの』であるに違ひない——無駄口をきかないのに恐ろしく、おしやべりだと思はせるのは何んにでも一通り趣味があり、通であり、議論があるからだらう、朝鮮研究などは却々積んだもの、事茲に到つておつさんの雲上人たる決して不似合ひではない、文章が素人離れしてゐる上に、舌もよく廻る、ざれを交へた皮肉などお手のものだ、口八手八に『情意投合學』までが天下隨一とある、但しドコまでも學であつて、その實行家でないことはたしからしい。

◇一口に言つておつさんはケチ臭

い根性を持ち合はさぬ人だ、疾く昔警察部長をしての今日だから官界に遇を得てゐる人ではない、だがおつさんが廿年とか朝鮮へその心身を突込んで来たのは官位や高祿をつけ込んでやつて来たではない、とおつさん自らいつぞや、例の愛嬌のある口唇を少し尖んがらして追懐したことがあつたつけ、お世辭が嫌いな上に、自ら官界にあり乍ら、墨丸を抜いたやうな多くの當今の役人を白眼視して行かう性に出来てゐるおつさんは、結局『官吏生活』でドコまでもうたつのがあがる人には出来ちやゐないだがその持合せた唐辛しのヒリヒリ味は今の李王職庶務課長には持つて来いの天成の武器だ、雲上入らしくないおつさんが雲上人として好個に納まつてる所以はこれが一つ？、次きには雲上から下界を眺めて、例の皮肉な思索をたぐり出して、唐辛しをバラまいて、ひとり下界の掃除に氣をやつてるには、もつて来いの納まり所、これがその二？、おつさん以て奈何——失禮多謝。

◆衣笠氏と刀

平田久雄

瀬戸さんが本號に『乗馬の話』利根川さんが『美貌の話』を書いてくれたが、次號には衣笠（中央婦人病院院長）さんが『刀劍の話』を書いてくれる筈▲今春本阿彌光遜の來た時、衣笠さんの研究の精緻なのに驚き、公然朝鮮の第一人者だといつた——それはど刀劍の方は研究がつんで居る▲確に堂々と講義をやつてもいゝのである▲『備前三光の話』か何んかを一ペーシやつて貰ふつもりにして居る。

佛國文豪

—アナトール、フランスの計—

京城婦人病院長 工藤武城

〔三三〕

style merveilleusement claire et nuance.

と評したのも決して誇張でも無ければ過賞でも無い。

◆五十二歳で佛國最高名譽たるラカデミー、フアンセーズの會員となり、七十七歳でノーベル賞を獲た、然かも此巨萬の賞金には手も觸れずに、貧民救助に寄附して仕舞つた。原稿料や印税の値上げに本屋にお百度を踏む乞食の様な文士と一寸違つた所がある。

◆巴里の場末なるマルクエ邊の貧乏書籍商の子と生れ、出てはゾラやバラザヴィウスと共に官僚と戦ひ入つては紅百合、白石、天使叛逆其他數十篇の千古不磨の雄篇を残し世界思想界や文學界の禮讚の裡に花々しい一生を終つた。

◆記し終つて瞑目すると、耳朶の大きい、廣額隆鼻の温容が眼前に髣髴するを覺ゆる(大正十三年十月十四日記)

◆今朝の京城各新聞には、いづれも二號活字の見出で、佛國大文豪アナトール、フランソア、チイポルの計が掲げられてある。其隣には六號文字のベタ組で、率直戦争で二千餘名の戦死が報ぜられて居る。人間の生命の値段が斯うも差別のあるものか。平等論者に聞いて見たい。

◆今年の八月十六日には、彼の八十回の誕辰を祝すべく、殆ど世界的の大祝賀會を催されて、伊太利のダヌンチオ等も長文の祝詞を寄せたぞうである。其後健康勝れぬ由は屢々報せられたが、こう早く永眠しようとは思はなかつた。古稀の齡から十年も生延びたから、年に不足は無いやうなものゝ愈々彼の大偉人が瘞れたと聞くと、中々に惜しひ氣持がする。

◆僕の巴里の寓居は、グラントベラの直ぐ側で、バンク、ツ、フランスの裏に當つて居て、彼の住居とは程近かつた爲に、屢々彼の銀髯類の如何にも人なづこい、頑丈な驅幹をゆさぶつて、ロンシヤンの方に散歩に行くのに出會つた

◆又社會運動の示威行列の時等は先發隊の最先に、眞紅の外套を著て、鏗鏘たる姿を現はし、ナシヨン黨の肝膽を寒からしめたものだ

◆僕は多士濟々の近世佛蘭西文學者の中でスーズエスツルと、アナトールフランスが最も好きである

彼の幽婉典雅なる希臘風の筆致は未來派や印象派の有象無象の連中が、尻逆立に成ても、脚卜にも追付くことでは無い。其測り知れない無限の想像力と縱横無碍、殆ど無際限に働く機智と、混々として湧出る、眼も縷なる絢爛透徹の文詞が、聊かのこだはりもなく織込まれて行く手際は、讀む人の總てを、恍惚たる詩境に引づりこませるには置かぬ。實にヤラルースの記者が

Esprit souple et complexe,
d'une delicate ironie, d'un

飯泉氏の事

吉田 莊 一

鮮銀の飯泉氏は、運動方面では、京城の大先輩である▲優に元勳として表彰しても好い資格がある▲氏は今ゴルフに熱中して居るが、その方の技術に於ても遙に儕輩を抜いて居る……といつても先づ抗議を持出すものはなからう▲處で面白いのは氏の坊ちゃん嬢ちゃんだ、日曜となると、お父さんと共に出場し、小さい道具で、大人同様、打つは、飛ばすは、頗る熱心なもの▲で、お父さんの沈懷に曰く『あゝして道具を持たして置かぬと、ヤレお山へ行かう、ヤレ動物園へ行かうで、オヤヂたるもの

趣味に生きる譯に行かぬ、處でゴルフ道具を興へてから父子一致、同一趣味に生きるの、成績頗る佳良、我輩も大喜びさ』と▲飯泉氏夫人を喪つて茲に三四年、今ではお父さん兼お母さんたらねばならぬ、その苦衷は、知友間でも深い同情を以て眺められて居る、好漢自愛せよ▲最近氏が旅行先から私に寄せた書簡に、

娘の結婚も滞りなく終り、東京に於ける武蔵野カントリクラブ駒澤クラブ、程ヶ谷俱樂部の武者修業を了り昨夜東京發、藥の富山を経て當地に來著、流石百萬石の城下、北陸第一の都市別けて兼六公園は當地の花と在候當地は大演習の諸準備に大騒に候明日は福井、敦賀を経て大阪に向ふ豫定(二十五日於金澤)

大審院と接吻

京城覆審法院部長 吉田平治郎

大阪毎日新聞紙上『我百合子夫人
心機一轉其刹那の光景』と題する
挿畫即ち圓い輪廓内に男女相密著
して立ち、互に手を握り接吻せん
として居る畫に就き、大阪地方裁
判所は風俗を害するものとして有
罪の判決をした、大審院は之に對
し次の如く説明して無罪の宣告を
してゐる。曰く

風俗壞亂の問題は新聞紙上に掲
載せられたる文章又は圖畫が男
女兩性間の戀愛に關する表情的
動作を描出したる場合に生ずる
を常とするも其文章又は圖畫が
單に兩性の戀愛に關する表情的
動作を描寫したるの一事のみを
以て風俗を壞亂するものと謂ふ
ことを得ず描寫せられたる動作
の陋劣なる情慾の發動を連想せ
しめ穩健なる國民の道徳的良心
を反撥せしむる場合に於て始め
て其文章圖畫に風俗壞亂の名稱
を冠することを得るものとす。
茲までは矢張り抽象的説明に過ぎ
ない、風俗を害するといふ法文の
文言以外に何ものも附加されて居
らない、大審院は更らに進んで、
然り而して男女兩性が互に握手
し相抱擁し相接吻するは社交上
の禮義として又其の相愛の至情
を表彰するの形式として歐米諸
國の風俗慣習に於て一般に認め
られ歐米人の道徳的良心は之が
爲め毫も傷けらるゝことなしと
雖も我國古來の傳習に於ては之
を以て一種の淫猥なる動作とし
健全なる道義心を有する者をし

て鑿せしめたる所なり之れ東
西其風俗習慣を異にし從而之等
男女兩性間の動作の道徳性に付
き彼我其感想を異にせるが爲也
此の説明は、風俗を害するや否や
は當該社會に於ける民衆の感想如
何といふことは結局健全なる常識
に依つて判斷するの外はないので
ある。さて此の次ぎの説明が本判
決の骨子である。

然りとも歐米文明國との交際漸
く親密となり彼我の往來亦從つ
て頻繁となるに及び歐米諸國の
風俗慣習其思想感情が我國民の
理解する所となると同時に道徳
風俗に關する思想に一轉機を來
し現今の道徳思想は男女兩性間
に交換せらるる此種の表情的動
作を以て絶對的に淫猥の行爲な
りとせず斯かる背徳の觀念を離
れて之を觀察することを可能な
りとするに至るを以て最早是等
の動作を絶對的に醜陋視したる
我國の傳習的道徳觀のみを照準
として其動作の善惡美醜を判斷
することを得ず其動作が當事者
の姿勢態度其四圍の状況に依り
陋劣なる情慾の體現を想起せし
むる場合に於て之を以て風俗を
壞亂すべき淫猥の行爲なりと認
むべく其男女兩性相愛し心情を
表彰するに止まるものは假令我
國古來の慣習に適せず又之を穩
健なる道義的良心に懇へて其批
判に多少の余地を存するものと
するも之を以て風俗を壞亂すべ
き醜行とし之に付するに淫猥な

る行爲の名稱を以てすることを
得ず。

時代の推移は風俗慣習に著しい變
化を來さしめる、兩性の抱擁接吻
といふことも一概に醜陋な行爲と
は見られないといふ風に日本の一
般の思想感情が變つて來た、從つ
て法を解釋適用するに當つても此
時代の風潮の推移に意を留めて社
會相の反映たるべき法律の眞價値
を發揮せなければならぬといふ云
ふのが此判決の趣旨である。

これは京城法政學校法學講義録
判例講話の一節——これを轉載
するの固より部長の具體的承
諾はない、お前亦た茶目をやつ
たなと叱られそうである、だが
社會と法律との抱擁接吻、法律
の社會化の爲め判事と雖も隨筆
を書く權利義務がある阿々、文
責在伊藤憲郎

◆森氏の風格

吉田 莊 一

有賀頭取にはせると、あれは十
徳連中ぢや……それほど、森(理
事)さんの句名は、世に著名なも
の▲だが句許りぢやない、書道、
書道趣味はなかくひろい、殊に
朝鮮新劇などには、多年人知れず
力を盡して居る▲處で、何事にせ
よ、餘り深はまりしないのが、こ
の人の一つの特性、俳句だとて、
「とんと凝る風はない▲この間も、
探幽の源平合戦圖——を手に入れ
たと聞いたので、定めし巨費を投
じたと思ひさや『あゝあのことか
あれなら東京の舊友が、こんなも
のでも好かつたら持つて行かぬか
といふから、難有く頂戴したよ、
但し眞偽のほどは持主の我輩にも
判らぬのぢや』之が森さんの風格

金剛山たより

東洋畫家 加藤 松林

[18]

そして九龍淵の大瀑と、往復六里谷川に添った小石道を上り下り、足先ばかりで歩くので相當疲れます。駐在所の巡査さんの案内でいろいろ説明してくれましたがおほかたは忘れしました。

なんでも、岩壁や樹木に名前を彫ることを今度道令で禁止するとか言ふことだけは賛成したので覚えてあります。九龍瀑の横の大岩壁に『彌勒佛』と大書して、施主や石工の名迄彫りつけた金圭鑽の仕業には大抵の者は腹立つだらうと思ひます。茶店の柱に張り残されたの名刺うち山に憧憬るゝ男と肩書入れたのなどありました。案内してくれた巡査さんは鐵砲かついで居りましたが、歸途神溪寺附近で雉二羽を落しました。

時は次第に晴れました。想像とは全然別の趣です。流れと泉の美しさは素的です。今夜は背水老人が著く筈、そして霜のやうに明るい月夜——前の鮮人宿の驢馬が哀れな聲でないてゐます。

足の裏に豆が出来ました。今朝内金剛を自働車を出て、温井嶺の下から歩きはじめたのですが、途中舊新の萬物相へ登つたので、馴れない足のうらに豆が出来てしまひました。

萬物相は單調です。眞にその名の如く、奇抜なる石層の重疊が、澄み切つた秋の大氣に白く輝いて空は何處迄も青く紅葉は愈々赤く青、白、赤の對照は眼がくらむ程強いものです。然し何處迄行つても變化は感じられません。青白赤の強い輝きが突き入るやうな刺激となる許りです。若し全金剛がかうした山の重疊ばかりであるならば、私にとつてあまり強く痛々しい山といふ外ありません。

とはいへ、まこと大町桂月老の言つたとほり、世にも奇抜を極めた山容であることは勿論であります——駐在所の部長さんが訪ねてくれました。失禮します。

今朝は足の裏の痛みがすつかりとれてゐました。宿の主人の言葉の如く温水の効能かも知れません。神溪寺、普光庵、玉流洞、飛鳳瀑

栗の名所、讓政府を過ぎてゐます。なだらかな山裾に尾花星月夜などの咲き亂れて、秋の陽の明るい中を過ぎてゐます。

發頭人の高木背水老人が一日延ばしたので私一人、それに、商賣道具のスケッチ箱を忘れて、往十里驛迄家内に持つて來させたり、出發早々の大失敗です。

洗浦へ鳥打の尾崎さんのところへ黒い著物の鮮人がその子供らしい學生を連れて行つて、何かくどくど歎願してゐます。平厩番は一時頃でせう。

午前八時半、長安寺著、山近くなるにつれてあたりは次第に夕暮れてゆくのでした。下り一里二十幾町、獸破の急峻羊腸の路をヒヤ／＼させながら自働車は下つてゆきます。

見下ろす谷々の底深く末輝里の燦火も見えかくれに、そして茫々の彼方遙か金剛連峯の上に十三夜の月を眺めた雄大さ——。

流れの音も細く清く、五葉松と樅の密林の中に私の宿も、満鐘のホテルも寺房もあるのです。

いま夕飯を食つてしまつて、これから寺迄散歩しやうと思つてゐます。

今朝、山は一面の霧、明鏡台まで行つてあまりに深い霧のために引歸し、方向を變へて摩訶衍へゆく

昨夜からひどいあらし、そしてお晝過ぎつとあがつたかと思へばお山の峯に白く光つてゐるのは雪でした。雲の低く垂れ下つた谷々の

◆ 籬 菊

中島 桂谷

あれはてし庭の籬に時を得て黄菊白菊今盛りなり

小松 久子

琴の音をたよりに訪へば萩籬色香ゆかしく白菊の咲く

紅葉も、すつかり色あせ黒づんで——季節ももうおしまひ、毎年ホテルの引上げる迄には雪が降ると土地の人たちは言つて居ます。

海が荒れて船が出ない、自動車の便でもあれば明日は元山へ出發しやうと考へてゐます。旅費もつき、先を急ぐ心持がするのです。

洋服論

京城府廳 加藤 賢

てはならぬ。

男にもせよ女にもせよ、洋装の日本人は其風姿がどうしても西洋人の様にシツクリしない、それも其等第一身體の出來が違ふ、其上に手の振り、足の運び、頭の置工合から胴の挿へ加減に至るまで、一々違ふからである。殊に女の洋装に至つては一層目立つ。元來脊の高い、脚の長い、腰の細い、臀の大きな西洋婦人に似合ふ様に發達して來た洋服を、背の低い、脚の短い、胴の長い、腰の太い、臀の割合に小さい日本婦人に直ちに應用して洋婦の姿をまねんとするのは腹が立つ程滑稽である。若しや虚偽や虚飾の爲めに洋装し、之れで己が姿が西洋婦人のそれの如くなつたと思つたり、又は之によつて所謂ハイカラと云ふ吹けば飛ぶ様な軽浮な虚榮心を満足させる如き不埒な女性が大正の聖代にあるならば、自己の洋装した時の姿を正當に見極はめる爲めに、先づ洋婦に和服を著せて見るがよい、そうして自分の洋装も正に如斯と心得て大差なからう。其上で洋服を拵へるなり、ハイカラ振るなり貴婦人を以て自ら任じ様とそれは勝手である。同時に姿が悪いからとて必要に迫られても猶便利な洋服を著ないのも困つた女の部類だらう。日本人が洋服を著るならば男女を問はず實生活に便利なるが故にと云ふことが第一の理由でなく

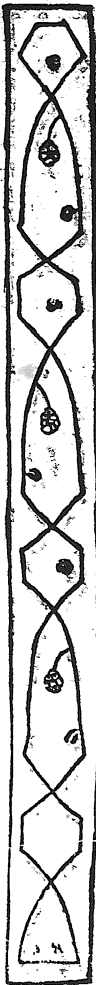
吃驚し、公憤し、終には情けなく感じて來た。どうしてコンナ阿呆らしい事が問題になり得るだらう？以ての外だと吃驚し、次に之を問題として取扱ふ様な者が幾人かあるとは以ての外だと腹に据え兼ね、最後に洋服と云ふ形式計りに氣を奪はれ而も何が爲に洋服を著るかを忘れ、西洋の風習に盲従する事に専心の餘り肝腎な女生徒が日本人である事を忘れて居るとは以ての外だと情なく感じたのである。自己の赤誠を捧ぐる時に日本人が帽子を脱らずに居られるか、又これ當に日本國民の教育から一時も離れてはならぬ大要素であらねばならぬ事を知るならばコンナ馬鹿らしい問題が起り様がない。西洋でも Do at Rome as the Romans do」と云ふ諺がある以上郷に入つて郷に従ふ可く教育せられて居る筈である。逆に西洋婦人の帽子に對する問題が起る程の意氣だけは國民としてほしいものである。

◆末松氏昔話

吉田 莊一

李王職の末松熊彦氏は、先年物故した宮中顧問末松謙澄千爵の甥にあたる▲千爵は明治十年ころ、東京日日の記者で 西南役に従軍し得意の名文で當時の讀書界を唸らせたものである▲で、役了つて、東京に還る時、郷里豊前に立寄り當時やうく七歳であつた熊彦氏を同伴し、汽車も汽船もないので例の宿場駕籠で、はる／＼あづまの都に上つた▲その時千爵が『叔父さんと東京へ行く勇氣があるか』と訊くと『ウムあるよ』といふ

『途中で母乳が欲しくなりはせんか』と、からかうと『馬鹿言つてらあ』といふ元氣△嚴父の房泰氏が東京に出られたのは、それから五六年も後、亦お母さんはそれから七八年もして上京せられた▲このお母さんが東京へ著かれた時『お前は誰れと寝みました』と問ふと『お父さんと』といふ答へ、『夜中に淋しくはなかつて？』と問ふと、その答へが『でも毎晩よそのキレイな叔母さんが来て、お父さんと三人で寝る故淋しくなかつた』……▲思ひきや之れですっかりお父さんの罪状曝露、當時知合の間で、一つ話になつたさうだ



褐炭の獨語

總督府技師 市村 毅

家、即ち盆地の地質は何でも第三

紀層とか言ふのだ相だが、それを代表する礫岩、砂岩、頁岩交互層の間に吾々の家族は何枚にもなつて挟つて居るのである、このことは鶏林炭礦とか鳳儀炭礦などの坑内へでも御道入りになつたり、雪頭面城東洞あたりでも御通りになれば直ぐに氣が付かれるだらう。

◎今日でこそ吾々の住家は處々松林の外樹と言ふ樹も無い荒涼極まる丘續きに過ぎないが、水成岩の發達する點から想像出来る通り、吾々が生れつゝあるときには深造火成岩と古生層から出来て居た此盆地の全部は大きな湖水であつたそのまはりには神秘的な大森林が繁つて、延びるが儘にまかせられた雜草と共に物凄く然し靜寂な光景を呈し、度々の洪水によつて此森林は絶えず水中に浸つて居た、年々歳々朽ち果て、其儘倒れた樹

或は水の流れて運が寄せられた流木は殊に入江の様な場所集つて堆積し、一方では繰返へし／＼腐つて行く水草がサブローナル即ち腐植土となつて吾輩達の原料を造つて呉れた。

◎森林があつた證據としては鶏林炭礦に於ける第四層上盤際の木節粘土から直立する樹の根や、その直ぐ側に倒れた炭化木を御覧になるがよろしい、斯うして出来上つた原料の上には引續き泥土や砂、時には砂礫がたまつて其下に吾輩達は次第々々深く埋まつて行つた地盤が沈降したり隆起したりそれ等は何度繰返へしたことであらう、然し終には何時かその區域が水面

◎吾輩は會寧の褐炭である、實は從來の行懸り上、明い世の中に出るのを餘り好まなかつたにも拘らず、一寸した拍子に慾の深い人間共にたゞき出されたのが因果となつて、愈々こゝ數年間をそちこち坊間に曝されることになつた、然し吾々と略ぼ同年輩であり乍ら、少々毛色が變つて居るだけで類に重寶かられて居る有煙炭や瀝青炭や粘結炭などの諸君に比べると、吾輩などは悲しい哉今日ですら見返へりもして呉れぬ連中さえもある、それにヤレ朝鮮炭だとか威北の褐炭だとか水分の多いことや比較的粉炭になり易いのを楯にとつて弱い者苛めをするに至つては、實に言語道斷の至りと言ふて好からう。

◎如何に吾々が除け者にされて居ても、如何に九州や北海道あたりの連中が重要視されて居ても、それは茲當分の現象に違ひなく、早晩何等かの方法により吾々を大に利用せねばならぬ時期が必ずや到来することを豫め信じて疑はぬのである、果せる哉、最近消費者側でも吾々の特徴を知つたと見えて低溫乾燥などの試験により經濟的且有意義な利用法を求め様と専ら努力はして居るらしい。

◎斯ふ言ふ譯で會寧炭の一味徒黨が成鏡線の全通と共に續々南下することも、又日本海を渡つて遙かに北陸地方へ踏み込み大に從來の體積を晴し得ることも決して夢想ではあるまいと思はれる、要するに吾々會寧炭の効能、實質に關しては知る者を知るで、誰が何と言はうが其時さえ來れば必ず判明されることだから殊更こゝに女々しい愚痴めいた説明は避けるが、それにしても吾々が折角此明い世の中に現はれて來た序でに、吾々の過去に於けるローマンスだけは是非共一通り聞いて頂かう。

◎國境地方を御旅行の方々は誰れも御承知のことであらうが、そも吾々會寧炭や仲間の鍾城、穠城、慶源、さては大炭田の稱ある古乾原、阿吾地炭などの住家は阿吾地のそれを除くと大方丘陵續きで、此方面の専門家は是れに國境の炭田と言ふ勝手な名前をつけて呉れた、炭量一億噸餘に達する吾々家族の居る處は此中でも一番の端、即ち會寧の西方四里なる五國城趾あたりから細長く北へ／＼と延びて、行營の南から細川洞へ通する一線を境として鍾城君の家族と隣合せになつて居る。

◎地質學者の説に従ふと吾々の住

に現はれると共に湖水の姿は消え失せてしまつたのである。

◎砂や泥土或は礫層は段々砂岩、頁石、礫岩に變つて行つた、そして其遙か下に埋没されて居た吾々は上からの大きな壓力と、それによつて生じた熱のために終に變化して、時代の經過はこゝに吾輩の如き褐炭を生ぜしめたのである、

但し附加へて置くが吾輩の家族又は親戚は必ずしも同じ材料から造られて居ない、例へば或處ではセコイアとかタキソヂウムとか松杉の様な針葉樹から、又他方では樺楓、楡、柳、肉桂などの潤葉樹の變化した場合も少くない、よく頁岩や砂岩の間に挟まつて太古の遺骸を留めて居る木の葉の化石を見ればそれも自然に了解出来やうと思ふ。

◎其後に引續いたのが此地方の火山活動で、一種の玄武岩が第三紀層の間に容赦なく浸入し地層を切断したりそれを押し上げたり、接觸變質に基く熱の影響は更に吾々を一部分天然コークスにしたり無煙炭にしたりして、當時どんなに脅かされたか知れなかつた、その熱も冷めぬのに今度は地入り即ち斷層の變來となり、それは到底過般の東京大地震處の騒ぎでなかつたそのために吾々家族でも驚く勿れ數百尺も引離され引ちぎられて未だ行方不明の奴さへある仕末である、豆満江が今日盛んに迂曲して流れて居るのも實の處此結果らしくへられる。

◎地表の蝕磨作用や化學作用は堆積物が水上に出始めた時から休まず行はれて居たために何時かは到る處削り去られて丘が出来、谷が生じ、終に吾輩家族の一部分まで空氣中に曝される様な運命になつ

た、思へば大自然の力程恐ろしいものはない。

土龍のたわごと

本町二丁目 中村友子

勿論、雜筆社の記者は、保險勸誘員よりも、たはいいのですけれど、筆の立たない私に取つてはより以上の當惑を感じます。

もとより、いゝ歌の詠めたためしの無い私ですから幾ら机の引出をかき廻して見ても今更、碌な物が出て来るわけはございません。

が、『口八丁足八丁』の前原さんにかうかくと乗せられて、それとも私の自惚心からか、筆を取つて了ひました。これが、記者様のお百度に對する償かと妙からずお氣の毒に存じます。

◇ はしけやし築紫のくにゝ來て見れば淡き色して茶山花の咲く

◇ はるかなる海の彼方に紫の岬けぶりて今朝は静けし

◇ 微笑も泪もあらで日ねもすを消に立ちて過す日もあり

◇ 今聞きし『短命相』のこのおもて鏡にうつしあかず眺めぬ

◇ わが胸の黒きとぼりのすき間より微かなれども光さし來ぬ

◇ わが庭の楓の蔭のみ佛は世を横に見て少しほゝ笑む

◇ みあかしの一つとほれる大伽藍なき人訪へどこにもまさず

◇ 君すでにみ佛ゆえに語るまじなべてはみ胸にうつりてあらむ

◇ 『なるがまゝ』かく諦めてうらゝ日を靜ころもて衣縫ひにけり

局長と鑑刀

吉田 莊一

この間の日曜、三矢警務局長が、深尾殖銀理事を訪ふた▲それは大學時代同窓であつたといふ許りではなく、共に刀劍の道に深い趣味があるので、半日清歡を共にしやうといふくわだて▲で、局長が應永法光の短刀を懐にして行けば、深尾さんは陸奥守忠吉の名刀の疊りを掃つて待つといふ體たらく▲殊にお隣りの櫻井理事が備前近吉の名刀持參は、時にとつての好趣向抜くは、眺めるは、品するは、評するは……意外の清會であつた▲處で局長の鑑賞眼は、之れが亦たタシカなもので、先づ九分九厘迄アタリといふので、列席者であつといはせた▲尙お搦けに『失禮だが之れはいかほどでお手に……』『どうかあてゝ頂きたい』『左様先づ〇〇圓位……』すつかり命中するので、開いた口が閉らない▲兎に角之れで京城には、刀劍道の一權威を迎へたわけで、同好者としては寧にうれしい次第だ。

美術家

—工藝者の養成—

洋 畫 家 高 木 背 水

半島の治政は漸く効果を擧げ僅々十餘年にして今日の安寧を得たるは總督閣下を始めとし當局者の勞を多とするところである。——が

一千餘萬同胞の貧乏は歐米のそれに比して實に悲觀せざるを得ない衣食足りて禮節を知る、現總督齋藤閣下が來任せらるゝに當り先づ

教育に眼を著けられたるは吾人も亦同感の至りである、やがて教育の効果は民度も一進するであらふ本年何月であつたか富田翁は技術教育の必要を本誌上に論ぜられ、

總督も亦美術學校創立の熱心があると聞き及んでるが未だ實行に到らぬ。一方では醫科、工科、法科其他數種の高等教育の府が設けられてあるが今のところ美術、工藝に類する學校がない。

今余が述べたいのは應用美術も諸共に進歩發展す可き教育機關の創立が目下の急務である——といふことだ、そして之は實に十年來の余の宿論である。

大正十年總督府は官營美術展覽會を起して既に三回に及んだ、此の會は出來上つたる作品を陳列して優劣を審査する斯道獎勵の機關に至極時機に適したりとは百人が百人異口同音に賛辭を吝まざる所である。

然るに斯く既成品の陳列場があつても學ぶ所が無いと云ふ奇現象を呈して居る、勿論内地には官立の學校もあり民間に研究所もあり目下鮮展の中堅と成つて居る者は其處等の出身であるがこんな事では眞に朝鮮らしい物を産み出す事は少し心細い。

明治初年の吾國は維新革命後の貧乏政府であつたが、當局者は銳意能く努力した、幾多の新規事業は大膽に亦熱心に遂行せられた、其中に工部省が美術學校を虎の門に設け伊太利人フォンタネジ氏を招き禮を厚ふして教を乞ふた、此人は巴里に學び、畫聖コローの兄弟で一面詩人として世界的の大家であつたが、當時貧乏極まる吾國に快く來てくれたのは政府の禮が厚かつた爲めである。中途で病を得て歸國するや次にサンヂョアエ

一氏が來た、此れ亦立派な人で非常に嚴格な教授をした、斯くて學校は明治八年より十六年迄八年間の熱心な教育に依つて以來美術にも工藝にも長足の進歩をして各種の工藝美術にも印刷術にも大なる感化を與へて今日に到らしめた昔の明治政府が投じたる金額は工藝方面にては今や數千倍數萬倍の利を負ふて國力を補け美術の方面にては東洋文化に燦爛たる花を咲かせつゝある。

目下の朝鮮にては昔し工部省が起した様な學校の創立が急務中の急務として必要が迫つて居る。余は内地にて故黒田教授にも正木校長にも其他有志の面々に右様の事を物語る毎に皆の人々が大賛成を云ふ。幸にして寺小屋類似でも宜しい、何か教授の機關が出来たならば數年の後には工藝百種は勿論印刷術や背景や乃至寫眞術にも大進歩を促し又優秀の士は美術家として天才を發揮し朝鮮らしい代表的の獨創の名作が産れ出るであらふ。

元來朝鮮人は中々器用で頭腦も亦尖敏であるから手先の働者には各種工藝的技術を興へて生活の資となし進んでは國益をなしたらんには衣食足りて禮節を知る立派な國民を造るに難くはあるまいと確信する。

若し又偉大な人格ある天才が現れたならば世界に誇る大家も出るであらふ。今迄でも鮮人中に天才肌の者も再三見受けるが悲しい哉指導獎勵の道がない。

官立學校と云へば數地買取に何十萬圓とか赤練瓦の大建築に何萬とか教授者には高等官とか判任官とか加俸とか中々莫大の豫算を要する爲め先づ本國議會の協賛を経て國庫の補助を仰がねばならぬとかいへば、それは一朝一夕に成立は出來ぬ、況んや昨今の如き方針では新規事業の企ては困難であらふと思はれるが技術教育にはそんな

に大袈裟な設備はなくとも五六十坪の教室が在れば足る、參考品だつて民間有志から借り集めても間に合ふ、最初は篤志家の力で寺小屋類似の物を創立し追々氣運に乗じて擴張して行けば宜しい、何にも大建築の校舍でなければ出來ぬとは云へぬ。

明治十六年工部省の美術學校が廢

止されてから廿九年西園寺公が文相として今の美術學校を完成する迄十三ヶ年は民間に私塾が東京に四個所あつた、余は大野塾の出身であるが今日の様に美術學校が完備し其他參考となる可き機關が充實して来た時と比べて學生の成績は昔しの私塾の方が劣つては居らぬ、寧ろ好成績を擧げてゐるのは當時の私塾生は非常な困難に打ち勝つ程の者でなければ入學が出来なかつた、今日先輩として多くの若輩を指導してゐる者は皆私塾に學ん

福澤先生の事

京城信託會社

西本量一

維筆九月號に、福澤翁の『西洋事情を讀む』の記事が出たのを見て私は非常に嬉しく思つた。官學閣と無學閣の横行闊歩する朝鮮に於て、福澤翁の名を耳にすることは

寔に珍らしいことである。然しながら朝鮮と福澤翁とは決して没交渉でない。翁は、文章を書くなら下女に見せる積りで書け、甚だしきは猿に見せる積りで書けと教へ自らもそれを實行した人であるが夙に朝鮮の文化にも眼を注ぎ、朝鮮の文化を向上するには、諺文を一般に用ひる様にしなければならぬことを提唱し、井上角五郎を朝鮮に送つて、漢文諺文混用の新聞を發行せしめた。それまで朝鮮では諺文は纔かに婦人の間に用ひられて居たに過ぎなかつたのである日本が朝鮮の爲めになしたる最上のものは何かと問へば、私は總督

だ人である勿論海外にも學んだ人々である。

小規模でも教室が出来たらは鮮人が東京迄わざわざ留學する必要はない、それだけでも非常な便利である、進歩の種蒔きとして一日も早く寺小屋の出現を切望する次第である、出来得可くば參考に美術館をと云ひたいが一時に多くを望むは無理であるから吾々先輩は先づ努力して時の來るのを待ちつゝ、近き將來に於て理想が出現さるゝ事を期待する。

政治十幾年の施設よりも、此の諺文の奨励にありと答へて少しも過當でないと思ふ。

福澤翁に就て序に世の識者の一考を煩はしたいのは、翁の教育の目的が聊か異なることである。翁の遺業たる我が慶應義塾の教育方針は翁が其の創立に當つて示された言葉

慶應義塾は單に一所の學塾として自から甘んずるを得ず其の目的は我日本國中に於ける氣品の泉源、智徳の模範たらんことを期し之を實際にしては居家處世立國の本旨を明かにして之を口に言ふのみにあらず躬行實踐以つて全社會の先導者たらんことを期するものなり

といふに依つて明かなる如く、第一目的は人格の養成にあり、學理の探求は寧ろ次位に位するのである。之れを外國の例に求むれば翁

は英國の人格主義を探り、米國の物質主義を排するものである。然るに我國教育の現状は小學より大學に至まで、寧ろ米に倣いて試験勉強と學理の詩込みに追はれ、人格者の養成を蔑にして居るの觀がある。之れが爲めに、物質文明は驚くべき發達を遂げたが、堅きこと盤石の如かりし國民思想は急速度を以つて崩壊しつゝある。豈教育方針顛倒せるの罪と謂はざるを得んやだ。

兎に角、翁は維新前後に生れた恐らく最大の先覺者だらう。尤も其の壯年時代には、随分思ひ切つた言行も敢てしたもので、まだ朝廷よりも藩公の命を重しと心得た當時にあつて、其の主君たる中津侯を馬鹿殿様と呼ばはり、楠公淺川の討死を、權助の首縊りに異ならずと喝破した。之が爲めに、同郷人たる朝吹英一などは翁刺殺の目的を抱いて態々上京した程であつた。

然しながら其の爲せる所、教へし所、讀せし所は何れも今日我國文明の根源ならざるはなく、若し明治に翁なかりせば我國の文明は今少しく後れたかも知れない。

表紙の改良

吉田 莊一

三井の天野さんから、本誌の表紙や、編輯上に就て、丁寧な御注意に預つた▲中には豫ねて氣づいて居だともあり、亦全く無頓著でさういはれてナル程と合點したところもある▲來る正月から一刷新したいと思ふ▲御厚情の段、くれぐれも深謝いたします。

浪 人 行

東京中澁谷 丸 山 鶴 吉

武正君！、兎も角も私は私の今までの生活で最も香氣な旅を續けつゝ、八日の朝九時に東京に著きました。歌心もない忙がしい騒がしい男が、何とかか何とかけりとかよい加減な事を口咏みつゝととう／＼落付くべき東京といふ殺風景な所に到着したのであります。家族六人と書生一人下女二人、それに見送りの方一人を加へて十人といふ御連中で可成り賑かな旅でありました、それでも一同無事に著いて見れば一安神といつた様な軽い氣持になる事が出来ました。

それに浪人の喜劇は東京驛頭から始まりました。いつだつて一等列車で乗込むだけ私に浪人といふことゝ同勢の多い關係から朝鮮に渡つて以來始めて二等車で東京驛に著いたと想像しなさい。汽車は著いた、相當澤山の手荷物ばボーイと書生の手でプラットホームに搬び出されました。然るに出迎へと覺しき人は一人だつて見えない。如何に私が浪人をしたつて私を諒解する友人も先輩も可成りに澤山ある筈だ。一人も出迎へのないのは電報の誤りでもあるまいかと案じられた程であつた。朝鮮で生れた高麗子を抱いてホームに降り立つて居た私は赤帽を呼んで荷物の世話を依頼して居ると、なだれを打つた様に馳せ參する一群の人々がある、口々にどうした事かと案じて居たといふ、皆んなが期せずして一等車の前で待ちあぐんで居たといふ話である。とり／＼に挨拶を交しながら自分獨りで面白い喜劇だと考へずに居られなかつた。雨は降り出して居る、浪人生活の第一歩を飾られた様な嬉しい氣分になつて友人先輩にかこまれて驛前まで出向いたのである。

武正君！、僕は先月の廿九日に多數の友人諸君に送られて感激の旅立をしてから東萊に一泊して朝鮮の垢を落し宮島に一泊して紅葉谷の風光に浸り郷里に老母を慰め先祖の墓に詣で先輩知友を訪ねて三泊し桃山參拜を志して京都に一泊した驛であるが、京都で先輩から豫定を繰上げて至急東上する様にとの電報を受取つた然し家族連れの旅で思ふ様にも參らぬので豫定も變更せず八日の朝に東京に落付

いた譯であります。その關係もあり家族は中澁谷の新居に送つて僕は別の自動車
で即刻雨を衝いて麻布櫻田町の宏壯な先輩の宅を訪つた。新市長の中村氏も加
へて三人鼎座して約一時間も論議をしました。それは東京市助役の問題でありま
した。拒んでも斷つても考へ直せとの切なる忠告があるので明朝八時を期して確
答する事にして引返して始めて住むといふ浪宅に歸りつきました。朝鮮に縁故の
多い千葉君や小林君が待つて居て呉れたので、友人から贈られたお壽司や重話を
開き、朝鮮から持込みのウキスキーを抜いて、盛に一別以來の氣焔を擧げて時の
經つのも忘れしました。豪雨頻りに窓を衝いて二階から見おろす杉の森が墨繪の様
でありました。助役就任勸告の友人や先輩が此の大雨を犯して相次いで此の新居
を訪ねて呉れます。かくして東京での浪人生活の第一日は暮れました。

朝鮮に對する義理と私の浪人生活への憧憬があまりに根強いので私の心の動き様
もありませむ。それでも今日だけは前官の禮遇だといふので役所の自動車を借り
て早朝から出掛けて昨日の語に龜を附けました、心地よく諒解して下さつた事を
嬉しく感じました。出張所に挨拶に出て日暮に歸つて來ました、浪人生活の第二
日はかくして暮れました。第三日は荷物の整理、第四日は障子張りに終日を費し
ました。

浪人の籠手の調べや障子張

など呑氣至極の事でもあります。

第五日は庭の掃除や、額や掛物をかけたりして過しました。第六日は書生が四中
に轉學が出來たので保證人として學校に呼出され教科書から洋服などの世話で暮
れてしまいました。第七日は椅子と机とを買ひに三越に行き友人を訪ねて過ぎま
した、これが浪人生活の略圖であります。

まだくお客さんも可成りに續きます。それに前官の義務として或は前官の待遇
として宴會にも度々引出されます。夜遠い道を電車で田舎まで歸るのだと思ふと
夜更かしも出來ません、又朝鮮でやつた饅頭に思切つて飲む譯にも參りません。

武正君！、これから先きどんな事をどん風に發見したり考へたりするか知れませ
んが、まだどさくさで頭に何も往來しません、落付いて考へる様になつたら又難
筆子を煩はします、只益々御健闘を祈つて曰みません、さよなら（十月十五日）

落書には閉口

仁川吉岡酒造場
支 配 人

結 城 次 郎

【三三】

は當るまい、自分の低級趣味を満足させれば其他の觀光客などは如何に不快を催さしめようと勝手たるべきものもとは大自然に對して恥しいではないか、廣告のしたい人達はこんな山中を擧げずに都會にてやるべしだ。

私はこの點に關し内地で徳川頼倫侯其他の名士が組織されて居らるゝ史蹟名勝保存會のやうなものを組織して日毎毎に荒れて行く朝鮮の史蹟名勝を美しく保存する爲めに指定地域を定めて一切の落書などを嚴重に取締つて欲しいものである。

匿名の手紙

平田久雄

朝鮮の名勝地と呼ばれる金剛山でも釋王寺でも慶州でも凡そ是等の地に遊んで吾人に最も悪感憎惡の念を催さしむるものは落書である凡そ巖石と云はず殿堂と云はず樹木と云はず到る處有象無象の姓名などを書き散らしてある有様は實に何とも云へぬ不愉快なものである、この悪習は内地にも相當あるけれど朝鮮程御丁寧ではない、朝鮮の上は王族大官より下は匹夫に到るまで競ふてこの悪習に耽るのだから堪つたものでない。奇巖怪石紺碧の激流に相映する處必ず觀光者の姓名が彫刻してあらぬはなしだ、流石文字の國だけあつて筆蹟などは實に堂々たるもので内地あたりに見る落書とは大分に趣を異にしてゐるが矢張り落書たるに相違なく目障りになること夥しい。

とを念じつゝト兜率庵の壁を見るとベタ一面の落書の上に半紙にこんな事が書いて張付けてあつた壁に落書をする者は教育のない者のすることである。何と云ふ皮肉だ、菊池先生正に頂門の一針ではないか、此文字の筆蹟が婦人らしかつたから同行の案内者に問ふて見たらこれは二週間程前迄この庵に住んでゐた若き尼僧があまり没趣味な落書多きに憤慨してこれを張り付けたのだと云ふてゐた、流石は信仰に生きる人だけあつて自然に對する趣味性はたしかに一段上だ。

釋王寺では薬水から少し登つた右側の大巖石これは又往來に差出た一番人目につく所に大きな字で總督寺内正毅、總監水野練太郎と肩を並べて御丁寧な彫刻かしてある故人を攻撃する様で甚だ濟まぬが兎に角朝鮮統治の最上位にある大官からこんな低級趣味の範を示されては其他の有象無象がいづれもよい事にして由緒ある寺院や明媚なる自然の風光を毀れて得々たるに到るのである。

金剛山の望軍臺に登られた人は御存じならん、頂上に近き兜率庵と云ふ庵の上手に小さな祠が三つばかりあるが無論これらには落書が一杯で殆ど完膚なしである、其中に三寸角大の文字で『菊池幽芳』と記されてあるのを見るゝであらう、申すまでもなく文壇の元老だ、私はこれを見て菊池幽芳ともあらうものがこんな俗物の眞似をされ自然の美を潰されるとは意外千萬に思つた同名異人であらんこ

一體落書者の心理状態とはどんなものだらうか、矢張り一種の自己宣傳だ、觀光の記念ならば何も往來の眞中の人目に觸れる大巖石に官職氏名などを彫刻して天下萬人の觀て楽しむべき風致をけがすに

副島伯が、京城日報社長に就任と決まるや、京城から盛んに匿名の書狀が無込み、現編輯局長や、營業局長を讒侮中傷したさうだが、そんなことは、あの社會の通習と見へ、現に近ごろも大毎社長に向け、名村氏(京城支局長)が當地で美妾を圍つて居るとか、家や土地をどうさかしたとか、しきつと中傷して行くものがあるさうな▲わしいイタツラだ▲實際名村氏などは、京城操觚界でも健全分子中の健全分子だ▲いつ迄も當地に頭張つて居て貰はなくちゃ困る▲昨今京城新聞が盛んに新聞界肅正の烽火を揚げて居る▲蓋し近ごろの見物だ▲京城の操觚界といへば、例の釋尾氏が、東京に去つたことは何としても寂しい▲氏の近信に依れば、來年の春は歸郷するさうな――目下『併合十年史』をセツセと編纂して居るらしい▲遙に自愛を祈る。

間島を視て

朝鮮新聞社

野崎眞三

清津の共進會見物の序に國境を越えて間島地方を視た。上三峰江岸に於ける岡門江に架設された木橋が、其中央部で『金網の門』を造つて日支の國境としたのも面白い

此橋梁は大人先生のみ渡る事が出来て其他は渡船で渡るのも支那式である。國境は河流の中央部となつてゐるが河流が年々變るので、國境も年々變化する。然し其住民の大部分が鮮人なので、勢ひ日本領土の觀がある爲に支那側の抗議は屢々ある。

國境は弱國の爲には晝然たる區劃が必要だが、強國には必要がない力が之を解決して行く。

間島の地味は全く肥沃である。そして官憲の干渉もないので、文化施設を煩がる人種には確に理想郷である。税金の賦課はない。時々巡警や兵士が金品の要求をするだけなので、結局鮮内の諸公課、賦課金よりは割が低いのは事實である。此鮮人の心持は牧民の位にあるものゝ忘れはならぬ一特性である。

龍井村迄は天圖輕鐵があつて甚だ便利である。龍井の市街は頗る雜然たるもので、街角に立つ歩哨だけが馬賊氣分を偲ばせてゐる。奉直戰爭の氣分が街中に溢れてゐて歩哨の姿が行人の腫を射る。門鏡の惡弊を聞いてゐるが、商場局を

訪問して叩頭をしたら歩哨が掌を出した。何を貰ふ積りか掌をピシヤリと擲いて遣りたかつた。

龍井を視て再び鮮地鍾城慶源を経て輝春に入った。妙は流言蜚語が熾んで、文武官は馬車を徵發して庭に避難の準備を整へてゐる。然し住民は祖國の運命とは全く没交渉で營々として働いてゐる。支那と云ふ國は面白い國柄だと感心させられた。

間島の草城は全く奥地に屏息し、時々所謂時局標榜の強盜として間島を脅かすのみらしい。然し今年には阿片を官兵の爲に刈採られたので、喰はんが爲の蠢動が幾分はあらう。更に共產主義運動は赤いロシヤと接攘してゐるだけ熾烈であるらしい。然し共產主義を理解すべく一般鮮人の程度が低く過ぎるのは事實らしい。

國境を出入して國家の有難さも知れる。暗闇からヒョツと出る支那兵の銃劍は決して氣味のよいものではない。だゞ低廉な物價や、廣漠たる處女地處女林を視る時、帝國のあまりに狹隘さを痛感した。

(一三、一〇、一五)

月百首

李王 末松 熊彦

十三夜

待ちくし最中の月のすみぬれば人の心も限なかりけり

十六夜

あらずもと思へど缺ぐる理に月も今宵はいざよひの空

二十日月

手枕の夢の名残りに山の端のはつかばかりの月を見る哉

雲月

天津空風に漂ふ雲間よりもれ出づる月のさやけかりけり

霧月

山の端にたつ秋霧を分け出で、清くもすめる月の影かな

風月

心なく立つ浮雲を吹き拂ふ風こそ月をみするなりけり

月夜の巻狩

京城府廳 谷多喜磨

◇
 異民族の統治の困難な事は文化の進んだ歐羅巴ではボーランドやアルサスローレンが其例を示してゐるし、文化の低い民族では亞米利加之のニーグロが時々反抗の氣勢を揚げて難治の實例を物語つてゐる。異民族の統治に最も卓越した手腕を有つてゐると稱せられてゐる英國人でさへ漸次昂まり來つた印度の反英熱には苦心焦慮してゐる。佛蘭西の劃一主義に失敗した迹を見てゐる英國は印度に對する方針も努めて寛容の態度を示してゐる様である、印度人が餘り潔癖な事を好まないを見るに死亡率が多からうが傳染病が流行しやうが印度人の好まない清潔法などは之を強ゆる事をなさない。印度の將來の爲め産業の開發の爲め實業教育の必要な事を考へてゐるが印度人が文學法律を好む傾向を知てゐるからして實業學校を建てないで文學法律の學校を設けた、初等教育の普及も何も構はずして一部の貴族の憧憬する大學は之を設置するに吝かでなかつた、斯う云ふ様な寛容な遣方では印度人自身が治むると餘り變らないかも知れない、併しガンヂーを中心とした反英熱は殆ど印度に瀰漫して來た、結局統治の困難と云ふ事は寛容であつても峻厳であつても何れにしても逢著しなければならぬ結果の様に思はるゝ、之は果して何故であらうか、統治に參與する人達

が民族の幸福の爲め身を粉にして働いても矢張り同じ様な結果に了るのであらうか、之には民族の誇りもあらう、歴史の追憶もあるであらう、併し乍ら結局は民族の心情にピツタリと吻合する政治が出來ぬからではあるまいか、印度人やニーグロなどを例に擧げては或は叱られるかもしれないが私は面白い一二の實例を持つてゐます月夜の巻狩と云ふのが其の一つである。

◇
 大正二年と云へば併合後既に四年目であり、當時は朝鮮の民心も大分安定してゐたが黃海道にはまだ所謂暴徒が方々を荒し廻つてゐた恰度私は其の年の二月黃海道に役人を勤むることゝなつたが暴徒の被害が頻々として報ぜられた、或は駐在所が焼かれたり或は面役所が襲撃されたりした、其の内で平山の暴徒と云ふのが一番狂暴であつた、其の頭目の韓貞滿(名前の記憶確かならず)と云ふ男は神出鬼没の概を示した、然るに此の男も其の後女を餌にした巧妙な詐術に引つ懸つて縛に就いた、所が其の殘黨が自暴自棄になつて暴れ廻つた、里長を捕虜にして無人島に捨てたり富豪を脅かしつゝ警察を愚弄した事もあつたが、時日経つて頭目韓の裁判の日が迫つて來た韓の殘黨海州を歸つて頭目を奪回せんとすと云ふ様な噂が傳つた。

海州守備隊も憲兵も警官も非常な緊張を示した、其の内に確かな情報を得たと云ふ事で夕方頃から先づ憲兵が動いた、守備隊も續いた、警官も繰り出した、何でも海州の裏に伯夷叔齊の隠れたと云ふ首陽山と云ふ秀峰があるが其の山に賊が隠れてゐるから巻狩をして平げねばならぬと云ふ事であつた各隊は隊伍肅々月光を浴びて山の四方を取り圍んで蟻も洩らさぬ嚴重さであつた、夜半月西山に傾く頃山頂迄登りつめたが賊の片影を認めずして歸つた、處が其後暴徒多く縛に就いた時其の者等の話に巻狩の月夜には首陽山に隨に自分達は隠れてゐた、巻狩隊が來て危いと思つたので勢子の群に雜つて夜中山頂まで登つた、が賊影を認めずと云ふので御苦勞を謝せられつゝ各々民家に歸つたと云ふことである。

◇
 此の月夜の巻狩の話聞いて他人の事ではない朝鮮の事情に暗い人達の仕事に斯う云ふやうな事が有勝なのではないか——異民族の統治の困難と云ふ事は斯う云ふ點にあるのではあるまいか——と教へられた様な氣がした。

再び町人に

今村 燦 炎

町人と名乗れども牙齦に銖錙の利を争ふはした心なければ、探る人の手はよごれざりけり、金銀花よし其の金銀はなくとも、懐の手に臍下丹田に迎し、無盡蔵の倉を握り居らば、棋局一變快心の笑をもらす時あらむ。

一時越へよ花野の景もある

茶代と心づけ

満鐵營業課 阪上満壽雄

茶代と心付はまことに奇しき精神の物質的表現ではある。料亭、貸座敷、旅館、ホテル、レストウラン等、等、統一し難きところに妙味はある。賣買では勿論ないが贈與とも云ひ難い、内部的條件付とでもいふ贈與には近いが、適言では勿論ない。満足と感謝の表示には違ひはないが、と云つて反對の場合に茶代と心付の心配なしに過すことの叶はない時もある。

料亭に於ても宴會と差向ひと泊りとは茶代と心付に段階がある。掛引のないところを仲居の力で無理に斷頭させるには心付も大きい。貸座敷の番茶は先づ決定しては居るが、敵娼の美醜によつて五十錢位の違はある。仲居の心付は茶代は出さなくても敵娼からねだらるれば茶代だと考えて心付は苦情もなく出さねばならぬ。

旅館とホテルは生活と現實の關係をもつてゐるだけにその考察も一様ではない。けれども旅館は茶代と心付の心配はしなければならぬがホテルは心付の工面だけで充分である。茶代は端のついた金は可笑しい様であるが心付は金額に懸念は入らない。淫風嬢として悪い温泉宿などでは少額の心付で全身提供を拒げないものもあるといふから心付もそこになると通關料としては安いものではある。茶代は旅館の格によつて考慮もされるが心付はお召の女中にも銘仙の女中にも區別はない。氣に入つた程度

でやれば文句はない。ホテルでも旅館でもボーイや女中は心付目的の労働であるから廢止は今の所出來兼ねるといふものではある。

喫茶店、レストウラントでは五十錢か一圓位の心付は五回か六回に一度位は仕方のないものかも知れない。と云つてうどん一杯や紅茶一杯では置くにも値しないことだし一寸考へることも稀ではないが正宗の四合も酌をさせたり、さもなくとも冗談の一つ二つも相手に

なつた女中だつたら十錢位の心付は惜しくはない所である。

理髮屋の心付も五回、六回に少額は心持ちの問題ではあるが無理にといふものではないらしい。

自動車の運轉士には半日も備へば一二圓の心付は當然ではあるが、人力車には心付の必要はないものと思はれる。それも行先によつては一式とは申し兼ねるものではある。

茶代と心付との起原は明かにすることは却々困難ではあるが社會的に必要とは云へない迄も虚榮だと云ひ切ることも出来ない節もある要は甘酢かみわけの苦勞人にして初めてその中購を得べきものではある。

秋風吟

明治町二丁目 木村屋主目 田中秀一郎

秋の氣はこの山峽に音もなく澄める水より立つかと思ふ

秋、秋、と囁く聲に目醒めたる野花の紅く重き願よ

灰色の雲に續ける十萬の夢に白く秋の風吹く

山門の仁王が腕の蝕みに秋の蚊群れて古都黄昏るゝ

海の彼方人あり吾れを呼ぶ如き心地せられて秋の潮聴く

月光の中に濡れば溶けて行く心を覺ゆ初秋の夜

美女が精菊に宿りて妖艶の姿凝らしぬ廢園の秋

秋と言へば萱の葉露れの音にだに涙流るゝ吾れとなりなき

俳 鼻 を 撫 り て

蝶 炎 今 村 鞆



しさ、思ひかねし戀に鼻黒めたる
牡猫の様にまで、俳人の觀る眼細
やかなるは嬉しかり、畢竟俳諧の
掟の寛濶なるは、袴を著けたる詩
歌の遠く及ばざるに因る。

◇抑も鼻の用は、唯嗅ぐ事に専ら
なるべきは、普く人の知る所、荷
子の言の如く、香臭腫脹は人によ
りて異なるべきも、とめきの薫り
に胸の高鳴りを覺へ、蒲燒の匂ひ
に蟲づを走りするは、獨り貴公子
大臣のみかは、世の中は兎角色食
二つの沙汰なれば、其方角へと鼻
を齧めかす事の多きは理りなり。
佳きも悪きも香臭併ひ嗅ぐは、口
の清濁併せ呑むと共に、げに浮世
の姿とや云ふべけん。

◇鼻は禍の門なりとは、曾て聞か
ざる所なれど、人の犯せる罪を己
が身一つに負ひて、則がれし例し
は、東西何れの國の古き文にも載
せられたり。其事の起りが、小夜
衣の袿綻びし、色糸の縫れに由縁
ありて、藥摩鍋の頭痛にては濟ま
されざりしと聞かば、誰れか鼻と
情け所とは、神經の筋に繋がりて
ふ、醫學の説を疑ふべき。中にも

楚王夫人鄭嬖の妬みに災せられ、
あたら玉の顔ばせを瓦と化せし魏
の美人はいと憐れ深し、又ダズス
の諫言によりて、女王エリサベス
の逆鱗に觸れし英國の秋官は、向
ふ疵に男の譽れはあれど、二つ共
に馬鹿正直の鼻には、神宿らざる
よき證據なりけり。遮莫れ斯る蠻
刑は昔語と消へてサルバルサンの
靈樂世に出でければ鼻聲にて湯治
の御件を願ふの世話もなく、首よ
り上の要石、富士の御山の動きな

◇そも如何にしてエホバの神は、
鼻と云ふ物を戯れに、人顔のま中
に附け置きけん、是あるが爲めに
兎角表看板に、誹の種を絶たざる
ぞ物憂けれ。同じ道具ながら、彼
の臍に見ならいて深山大澤に跡を
晦まさは、賢者の終りを全ふすべ
く、又或は耳の如く、大隱を學ん
で横町に棲まはゞ、ダーウインの
如き物好き人の外は、結節なごに
よも目は著けまじ。白河公の言ひ
葉ならねども、火の見櫓と上は役
人は、常に衆目の目指す所となり
て、煩ひ多きに似たらずや。

◇昔し人里絶へし山奥に、瘡毒に
て鼻の蝕み盡し、やから打寄り彼
の埃及に在りしと云ふリノコラの
如く、人目を耻ぢて隠れ棲みける
が、遺傳の作用により、後の世は
遂に悉く鼻柱無き一族とは成り了
んぬ。或時不圖人里に出で、並々
なる世の人の顔を見て、驚きの眼
を睨り、果は可笑さに打興せしと
云ふ。左もありしならん。假りに
人々の顔が、其やからの如く、眞
中に唯二つの穴あるのみならば、
美人の品さだめに手敷もかゝらま
じく、團子鼻、獅子鼻に、生みの
双親を怨む花嫁はよもあらじ。

◇素より鼻の形は天賦の質なれば
韓非子が刻削の教へにも由り難か

り。落窪の物語には、鼻の穴に人
を吹きいららぐ、彌や太きもあれ
ば、川柳點には持參金のよくく
見定めねば、見判け難き小さきも
あり。鞍馬愛宕の僧正坊が、神杉
の露置く冷かさに苦しむと、女中
が鼻の霜やけを免るゝと、孰れか
幸なるべき。必ずしも山の高きを
以て貴しとせず。靈矯あるを尊し
とすべく、禍福は、馬の鼻網綱へ
るに似たるべきや。昔し弓削何某
が男根の美事さは、口善悪なき京
女に唄はれつれど、又玉の底深
き、或年増女が閨の閑まに、仇は
なくと、男を罵りしと云ふ諷り
もあれば、ゆめ當てにはすべから
ず。

◇也有の翁は嘗て鼻の箆を作り、
鼻と云ふものゝ名は、偏へに俳諧
に止まりぬらんと、嘆きたれど、
萬葉、古今に、鼻の紐を解きて戀
人をまぢたる、鼻の色に遠出の人
を止め兼たる、歌あるを知らざり
し迂濶にや、さて俳諧には、鼻の
事よめるが數ある中にも、臘月夜
をあめつちの鼻のつまりしに喩へ
たるは流石に偉なり。雪の道行人
の鼻赤き、蓮の香りを目に通はし
たる、或は又、齒取りが梅が香に
見向きもやらぬ、杯の趣向より、
若草に鼻押つけて寝ねし積の愛ら

き文化の世こそ有難けれ。

◇更に想ひを回らさば、鼻につきては、猶様々の語り草こそ多けれ百萬石を鼻毛に鑿きし、加賀の大名は遙かに輕業師に優れども、同じ鼻毛に蜻蛉を釣りし、阿呆の男は手品師にも劣ると謂つべし。天狗は己が鼻を、戀の假寝の仇枕に使用して、互に抜き差しのならぬ苦みに陥り。象の鼻は、蒼蠅を追ひ拂ふはづみに、時々普現菩薩の軟かき内股に觸れしにやあらん。犬の鼻は、スパイの鋭さに喩へられ、南部の鯉は、いこぢ者の仲間

に敷へらる。蝮蟻の鼻筋は背に通れども、誰も美人とは稱へず。蘭鑪の鼻は、もがさ男の酒毒に罹れる醜くさを賞翫せらる。大佛の鼻は、晝の蚊の隠れ場所とはなり、地蔵の鼻は野鴉の糞にも汚さる。楠正成が千早城に采を振つて、黄金湯に寄手を惱ましたる、囚はれの子胥が、越え勾踐の遺矢を嘗めて、吳國の再興を謀りたる、共に鼻を掩ふて忍び難きを忍びたる、忠勇義憤の芳名は、後の世に至るまで、永く馥郁として香ばし。◇閑話はさて置き、熟らく／＼うつし世の有様を觀するに、國の爲め世の爲めに盡すべき務を忘れ。己がしゝ利慾の鼻の突合せに、争ひ辨めく輩ら多きは、鼻を鑿むる限なれ、先づ上は、關が原の合戦に先祖が勝軍さ負軍の槍先の功名と名折れを鼻にかけて、我儘に振れ舞ふ甲虫の子孫より、下は米作り虫、蟬虫共己が働きを鼻にかけて徒黨を組み世を騒がし。或は又紙食ひ虫等が、南蠻の書物を鵜呑生ま囁りとして、己が智恵才覺を鼻にかけ。殊に小判虫は黄金の光りを取扱ふにより、次第に鼻の下なる

空殿建立に苦しむ者共多くなりて世は物騒がしく。漸く危からんとす。見よや、大河を距てたる東の岸には、鼻息荒き夷共、虎の如き眼もて耽々として隙を窺竄へるを知らずや。禍は目と鼻の間なる篇

惡 詩 三 章

木浦公立小學校

吉 村 貫 之

牆に在り。吾が日本の本のますら男達、神代の昔なる猿田彦の如く鼻柱太しく建て、彼の夷共を鼻であしるふ用愼こそ緊要なれ。鼻かしこ鼻かしこ。

◇今頃の氣候を秋高馬肥等と申す様に候得共、今年的全南は正に馬瘠すとも形容可致か、先以て御清寧御起居奉恭賀候、昔より佛の顔も三度とあり靜かなること林の如く自若とかまへ候積りに有之候處、何分疾きこと火の如く燎き立てられ候ては起ち上らぬ譯にまゐらず、さて起ち上りは致候得共、平常之不用意は唯周章狼狽するのみにて如何可致や、頓斗遁げ場に困却罷在候、無より有を生ぜよとは科學に多大の趣味を持たれエネルギーの原則を信ぜらるゝ貴下としては甚だ御無理な注文と恨めしく存上候。

◇昔小生を見た縁な男有之、同志の詩會の末に加はり居り一日詩題を得て歸り賈島の推すか敵か迄にも參り候事なれば結構と可申候得共、未だ趣向すら出来不申頭痛鉢巻の體たらくにて苦心慘憺罷在候を側に縫物し居たる韓態ならぬ細君が「詩を作ると云ふ事は私共のお産の機ですな」と同情致候處主人佛然として色を作し「卿等の産むこと難しと雖も元其の有るものを生むのみ我が無きものより作らんとすると其の難き何れぞ」

申候由、先づ貴下の小生への御誅求は此の語に似たものと存候、古諺に窮鼠御て猫を齧むとも申候、如今下らぬ事を書きたてまくし立て、貴下を鏡筒中におしこめたきものと存居候。◇折角の御請求に事實申すべきとも無之、こゝに過ぐる乃木會の日に久方振に試みたるこしをれ一二御榮草に

將軍辭世十三年、猶覺風標在面前、世情江河追日下、慨想得不淚潸然。

勁節純忠社稷臣、生爲師表死爲神、愧我何顏見父老、一語千秋泣萬人。

◇卿如欲死雖有日、天語丁寧無限恩、殘骸預期百年後、從容伏双拜天闕。

◇全くなつて居らず候、今夏上京中御目にかゝり得ざりしことは甚だ失禮であり且つ遺憾に存居候、御令息御足痛其の後御經過如何哉昨日迄人の事とのみ思ひ居候處、目下小生も少女と二人留守居致居候様の次第つれ／＼も加はりつまたらぬ事をば一笑迄に 早々

テームス河畔

—兩大學のボート、レースを見るの記—

東京府下龍之川 守屋 榮夫

一九二三年三月廿四日、オクスホードとケンブリッジ兩大學のボートレースがあるので、それを見に出かけた。

英國では、スポーツは日本の國枝と同じく、國民の魂を鍛鍊することを主義とする。肉體の鍛鍊と同時に協同一致、堅忍持久、最後の勝利の信念を鍊磨するものである。フットボールに於ても此の點が明瞭にあらはれるが、ボートレースに於ても同様だ。兩大學の競漕は歴史のものである、殊に從來の結果に依るとオクスホードは三九回、ケンブリッジは三四回で、一九一三年以降ケンブリッジは勝ちつゞけて居るので、兩大學の出身者を中心として、倫敦の民衆、いな英國の民衆は、兩方に分れて互に氣勢を張る。新聞紙も此の人氣に投ずる爲、期日の前から選手の練習振りなどについて詳細な記事を載せる、満都の人心は彌が上にテームス河畔に集まる。遊覧船の切符の廣告、觀覽席の豫約などが初まる。といふ情勢である。で私は朝鮮銀行支店を通して船で見物することとし、大枚五圓を投じて切符を買ったのであった。

正午ミユンスター波止場から乗った。イングラント號といふので二百人位を乗せて立錐の地がない程であつた。船は國會議事堂や、テ

ートガラリーを右に見て上流へと進むだ。空は不相變ドンヨリと曇つて、水を渡る風が寒かつた。冬の厚い外套を著てゐてさへも風がしみ通る位であつた。一老婦人があつて船のヘットの方に座して居つたが河風に堪へられぬらしく唇を紫色にして居つたので好意を表して席を換へてやつたら喜んで居つた。

コースはブットネーブリッジからブレウエリー附近迄で延長四哩餘である。ブットネー橋の下ボート倉庫のすぐ側がスタートになるので橋の上には民衆が重なり合ふて居つた。これから上流の河岸は双方とも人の山であつた。河に面した家々の窓から、家屋の上から數多くの好奇の目が光つて居つた。處々に棧敷が設けられて、國旗を交叉し、望遠鏡を持った紳士淑女が椅子に腰かけて居るのもあつた郊外に出ると人家が途絶えて堤防がつゞいた。その上にも人が幾重にも重なり合ふて居つた。河の上には見物人を滿載した船が在つた。タイムス紙は數十萬に達したらうと書いた位である。所々に見物船が止まつてゐる溜もあつた。水上警察の發動機船がけたましましい音をたて、軸先に波を躍らして進んで行つた。不圖管が騒ぐので其の方を見ると、小さい二つの船の上

に自轉車を乗せて、夫婦連れで水上滑走をして居るのが見えた。其の格好が可笑しいので兩岸から野次と喝采とが起つて來るのであつた。

ブレウエリーについて船がとまつた。對岸は平地で此處にも見物人がゐるが、やゝ距離が遠くなるので左程多くはなかつた。此方の岸は民衆があつて、いづれも屋上にいたるまで滿員、河岸は水際まで立錐の地がない程の人だかりであつた。すると河下から一隻のボートがやつて來た。支那の學生で外國の婦人を乗せて居つた。私等の船を廻つて對岸へ行つた。二羽の白鳥が悠々と水を泳いで來た。飛行が二幕プロペラーの響を民衆の頭上にとどろかして過ぎた。先程取残された夫婦づれの水上自轉車が、衆人環視の間に矢張此方の岸についた。

不圖後の方に喧騒の聲が起つたので、ふりむいて見ると、滿潮時と見えて、河水が漸次河岸を浸蝕して來る。水際の見物人は後すざりせざるを得ない。後の方は退却の餘地がない。周章狼狽の結果、河に落ち込む婦人がゐる。それを助けうとして靴のまゝ飛び込む紳士がある。水と泥とをかけられてさわく連中がある。河水は益々増して來る。石垣の下までもう一ぱいの水だ。石垣にすがつたり、瓜たてしたりして、何とかして現状を維持しやうと努めるが、水はいよゝゝ増して來る。喧騒が益々激しくなつて來た。

其の途端にボートが見えるといふ聲が聞へて來た。丁度午後の五時である。パンス橋の上手を二つのボートが殆んど並行して進んで來る。河添ひの群衆は風に吹かる

と野の草の如く動揺して、盛に聲援をあげかけた。旗かはげしく打ふられた。刻一刻ポートは近づいて来た。ヨックスの合圖に依つて出發するオールが只一本の様に見える。群衆の目は只ポートに集まる。オールに集まる。勝敗如何と片唾をのんで凝視して居ると、やがて決勝線に入った。その直後に審判官の乗つた船、警察官の乗つた船など相續いた。四分の三艇身ばかりでタークブリーの勝となつて、競技終了の合圖があつた民衆は口々にオクスキードをほめた

ホテル漫筆

—ホテル、ゾーヌから—

京城朝鮮ホテル

伊 藤 龍

我等の乗つた船は直ちに錨をあげて歸途についた。水の上にも、河の岸にも黒い行列が相ついでいつ果てさうにもなかつた。かくして倫敦の夜は當日の競漕の物語でふけて行くのであつた。翌朝の新聞には競漕の寫眞が出て居つた。勝者たるオクスホードの選手と共に、ケンブリッヂの選手の寫眞をかゝげ、オクスホードの勝利を讃稱すると共に、ケンブリッヂの努力をほめた記事があつた。こゝにも競技の精神と英國の紳士氣質とが窺はれるやうに思はれた

客衆が、ボーイ諸君に用事を命ずる最初の呼掛に、

A者『おい、ボーイ』

B者『ボーイさん』

A者の呼聲は強いアクセントがある、B者のそれは、柔らかい、優しいメロデーを含んで居る。

A者の用命とB者のそれと、何れに、其結果の表示が好現象を呈するや、讀者の判断に訴へる。

外人は『My boy』と云ふ。

蒸し暑い頃は、レーム、ドアが開かれて居る。勿論、ドアの前には管張りスクリーンが立てられる。室内は、透き通つて見える。日本人は裸が好きだ。室内では猿股二つ、丸裸、ベットの上下に跌坐

をかいて居る男性を見る。年頃の西洋婦人は、其のルームの前を通るに羞恥顔、急ぎ足、馳せ行く。オールド、ミツスの感傷的な外人になると抗議を申込む。

『どうぞ、御遠慮なく、お暑いでせうから、お裸に』と、氣のきいた奥様は團扇の軽い風の流れを送りながら云ふ。

西洋婦人は裸体を美的對象として藝術的鑑賞を與へるが、涼しい目付をして『お裸に』と云ふ口吻を吐き出さない。裸の体裁も、時と場所の選定が必要だ。

◆
ダイニング、ルームの一隅、テーブルに凭りかゝり、ホグとナイフを皿の上に、珍奇な交錯形を作つて、一寸軽く頷く。其の瞬間無

意識に、著物の裾を捲り上げる所謂紳士の姿を見る。脛毛は我が物顔に遠慮容赦も夏の雨、現はれる隣りテーブルのレディー、身震ひして、向をかへる。

◆
脛毛の刺戟も偉大なものだ。

食堂は食事をとるべき場所である飲酒すべき場所でないといふ正確な字義は誰れでも識つて居る筈だと云つて字義の命ずる儘に行ふ者はない。それが當然なのだ。

ポート、ワインの一杯、ウキスキの一杯、要するに、二三杯の加減を施しつゝ食ふべきものを食ふのだ。

肉片の如きを基盤の目の様に豫め切つて置いて、右手にフォークを握り、一切れ／＼突き上げながら口元に運びつゝ盃を傾ける。盃數重なり千鳥足、絨緞の上に酔歩、丸橋忠彌、高島屋氣取りも餘り感心したシーンじゃない。

食堂で飲んで食事も済まし、猶飲み足りないと思望が唆るならば酒場のボールド鏡に姿を映すのだウキスキで御座れ、カクテールで御座れ、強度の酒精料は招いて呼んで居る。充分酩酊しても酒場自身は不平を言はない。

◆副島伯の事

吉 田 莊 一

京日社長副島伯は、よく／＼日本食は嫌ひと見へ、どんな招待を受けても、日本式料亭へは眞つぱら御免とお断りして居られる▲反對に文筆生活は、性得好きと見へ、一之から先々は、社内にはベッドでも置き、あすこに起臥しやうか……といつて居られる。

煙草と國民性

奉 天 廣 江 澤 次 郎

とせねばならぬ。

朝鮮の煙草が大體に於て世界の
いづれの産葉と混合するも個性を
没却して能く調和するに反し、支
那産の莫が明確に一々夫れ自身
の癖を發揮して調和性を缺く、但し
同じ支那産同志なれば大體に於て
調和する、是は煙草専門家が不
思議に感ずる處であるが私は此煙草
を通して支那及朝鮮民族を觀察す
る時、其所に謂ひ知れぬ感慨に打
たれる、此煙草に現はれたる神の
攝理、自然の約束より推斷すれば
内鮮融和は容易な問題であるが日
支の親善提携は仲々困難と云ふ結
論を得る。

◇

私の従妹で東京の女子高等師範學
校に在學して居た者があるが、彼
は偶然私に面白き話をして呉れた
『朝鮮婦人の留學生も居られま
すが入校後間もなく進んで内地
化し、服装も髪も言語も殆んど
私共と變りがないが、支那婦人
の留學生は飽く迄お國本位で服
装も髪も支那流で押し通し其所
に融和なく同化しないですよ』

私は朝鮮人が同化し協調する處に
一層親和と朝鮮民族の貴き價値が
あると感じ、又支那人が四千年の
歴史と嘗ては東洋文明の淵源なり
しを誇りとし飽く迄支那流で押し
通す處が偉大なる點だと思つた。
大いに世界的雄飛せねばならぬ大
和民族は他民族の特性を深く考察
し互に理解せねばならぬが先づ以
て一般的に敬愛と云ふ事を出発點

支那人に絶大な尊敬を受け又英國
の勢力を牽平として支那大陸に植
付けた元の總稅務司ロバート・ハ
ート氏は功成り名遂けて歸國に際
し在支英人に語して曰く、

『私が支那に於て成功した秘訣
は終始一貫支那人を輕侮しなかつた此一點のみ』

平凡な言葉の様であるが日本人の
大いに味ふべき言であると思ふ。

◇

早稻田邊の下宿屋では日本の學生
には温い飯を出し支那留學生には
冷飯を喰はすとは以前私共の耳に
した所であるが親善なり融和なり
は先づ手近の日常の事から始めね
ば往々にして千仞の功を一簣に缺
ぐ様な結果に陥る、又双方人情風
俗を異にする處から意外な疎隔、
衝突を來す事もある。支那に於て
は男女七才にして席を同ふせず等
と所謂孔孟の教に培はれて居るだ
けに、女が男に笑顔を見せるのは
『妾は君を愛す』の意思表示であ
る、處が東京邊の下宿屋の女中連
ボ子にでもありつかうとも思つ
てか不用意に愛嬌も振撒けば嬾ん
に冗談も云ふ、然るに青春の血に
燃る留學生君雲烟萬里日々故山の
松園を夢み時に懊惱もする折柄と
て八三化七お多福の女中さんも案
外別嬪に見え而も『妾は君を愛す
』の意思表示を連發するのである
から堪まらない、情約成立と速斷
し常軌を逸するの無理はない、

【三〇】

處が無心の女中さんは猛烈な肘
砲を喰はし『チャンコロの癖に生
意氣だよ』位で赤恥を掻かせる、
木から落ちた様な留學生君憤恨に
堪へず胸に刻み附られた創痕は一
生癒へない、こんなのが本國へ歸
ると往々排日の急先鋒？。

◇

日本人は白を以て清淨純潔を表
示する物として吉事に用ふるが
反對に支那人は紅を吉とし白を
凶事の表象として忌み嫌ふ。
丁度一昨秋奉天神社のお祭が行
はれた際、白拍子の多く住む十
間房の兩側は夫れが日本人の家
だろうと支那人の軒下だろうと
お構ひなく白いメ纏で張り廻さ
れた、白いメ纏は日本には神聖
でありお葬出度い表象であるが
支那人には白は禁物、不吉の
訪問を請けたとしか感じない、
不愉快で堪へられぬ、支那人は
暮夜密かにソツト外して捨てる
と翌朝日本人が又丁寧に張つて
行く、こんな事が繰返され之が
原因となつて當日祭車と衝突し
日支人大亂闘をやつた 双方多
數の死傷者を生じ日支人間の感
情は著しく疎隔し、日支親善は
窮極痴人の夢かと感ぜしめた。
私は敢て日本人のみが悪いとは
云はぬが、日本人も雅量を示し
支那の風習を尊重し紅いメ纏で
も張つてやり支那人も悦ばせ、
日支渾然融和、お祭気分を漲ら
せ共にハシヤいだ方が遙かに面
白くもあり恐らくば神様も御満
足じやろうと想はれる。

◇

私共は各方面より民族性の研究、
習慣風俗の調査をし親善同化の徹
底に努めねばならぬ、若し夫れ親
善同化に不幸失敗せんか日本人の
大陸發展は絶望と同時に我々は年
々増加する七十萬の小國民と共に
狭き母國にて踞踞齟齬の外はない
今吾々は其分水嶺に立て居る事を
自覺し善處せねばならぬ。

車上の論客

京城郵便局
監督課長

新 貝 肇

昨春まだ寒い頃の事であつた、私は夜裡里から湖南線の上り列車に乗つた事がある、其の汽車は幸に空いて居たので二等室の一番奥で人の乗降に煩はされない所に座席を占めて直にウトウトと眠りに落ちた、間もなく後の座席の大騒ぎを目を醒された、聞いて見ると何でも話題は靴の事らしい、つまらない事なので私は再び目をつぶつて了つたが何分騒が馬鹿に大きいのと議論の内容が小供らしい馬鹿げた事であるにも拘らず當の二人がむきになつて論争して居る事が滑稽で却て興味を惹いたので私は眠れもせず横になつた儘聞いて居た一方の人は、短靴の愛用者は紳士であり、編上靴を履いて居る者は労働者若くは下層社會の者だと云ひ、他方は之と正反對だと主張して居るのである、御互にありとあらゆる材料を持ち出して對手を屈伏せしめようとする、私は餘りの滑稽さに此の奇抜な二人の論客の顔や風采が見度くて時々うしろの座席を振り返つた、見ると二人共既に五十恰好の洋服をつけた人だ、先から聞いた話振と綜合して考へるにどうも朝鮮開發に一番乗りをやつて來て今では物質的に……恐らく御當人は精神的にも世の指導者と自認して居るらしい……相當成功して地方の有志として種々の公職に携つて居る人らしい、さうして二人は永年親交を續けて來て

居る様に思へるが此の議論では双方とも一歩も譲らず眞剣に口角泡を飛ばしてやつて居る、私が聞き始めてからも儼に一時間以上論じて居たが、とうとう双方の材料も盡きて漸く二人とも不満らしい沈黙に落ちた、程なく列車は大田に著いた、時に午前一時頃、寒くて堪らないし京城への列車までにまだ時間が大分あるので私は一二等の待合室に這入つた、所が先の二人の論客も最早打解けて他の話をして居る、深夜の事としてストーブの火は消え果て、相變らず寒い二人は頻りと譯の怠慢を鳴らして居たが一人が事務室に交渉に行つて御陰でストーブの火も燃やされて我々一同は口にこそ出さね其の人に感謝した、其の内に一人の朝鮮人が這入つて來た、勿論彼は數分前ストーブが如何にして燃されたかと云ふことは少しも知らなかつたのだが彼は一般の人よりやゝ前の方に出て火に當らうとした、これを見た例の人は『火の心配はせずにあたる時に許り人先に立つ』と云つて突き飛ばした、所が突飛ばされた鮮人も黙つて居らずに大喧嘩となつた口論では靴論者側が稍旗色が悪くなつて來た。それを見た一人は『這な奴は引渡してさう』と云ひつゝ出て行つた、間もなく一人巡査さんと一緒に歸つて來て先の鮮人と四人で出て行つた、四人の後姿を見送つて當時まだ朝

鮮に來て日の淺い私は考へさせられた、こんな内地人があつて而も朝鮮で地方の有識階級、指導階級として立つて居る様ではまだまだ内鮮融和の前途も遠慮だと。それから約一年を經過して私は本年夏忠清南道の海岸に沿つて群山の對岸水東里から大川まで自動車で旅行した際、又次の機な輕験をした其時は私は友人と二人だつた、何でも庇仁から瑞山の普通學校に轉任して赴任する所だと云ふ鮮人教師と乗合せた、勿論他にも鮮人客があつて満員だつた、途中で自動車は停留したので乗客も降りて疲れを休めた、所が今度乗る際或る鮮人が友人の今まで占めて居た善い座席を先に乗りて占領して居たので友人は『君は其處にかはるんですか』と反問した、するとその鮮人は黙つて席を讓つたが其の時刻で之を見て居た鮮人教師の顔に鋭く閃いた或るものを私は見逃がさなかつた、自動車は發車した、今迄軍上で深切に此の地方のことを説明して呉れた教師は飄然態度が變つて不機嫌さうに口を緘して一語も語らなくなつた、私は此の時にも考へさせられた、昨年の場合には其の非内地人側にあることを認むるに吝でない、而し後の場合は我々は内地人同志に對すると何等異なる舉動に出ては居ないことを確信する、而も我々は感情の衝突を來した、内鮮人間に蟠る所謂僻根性が働いて居るのを知つて内鮮融和と云ふ事の益々以て至難である事を痛切に悟つた、我々は此の至難の事に處するには賀川氏が死線を超へて労働者階級に接して居るあの努力に劣らぬ努力の必要を思はざるを得ない。

指環の語

京城第一高女教諭

梶原峰治

〔三三〕

或人が指環の起源について、次のやうに語つたことがある。それは昔『アドリア』海の沿岸の諸國は競ふて此海を占有しやうとした。此海を占有するとせめとは其國の盛衰興亡に直接に關係があつたからである。幸に占有し得た國王は其印として毎年『アドリア海』に

切目のない金環を投げ込んだものである。之は想ふに『環の圓さ』が如く圓滿におさめる』『絶對に服従させる』といふ一種の威令の意味が含まれて居たに相違ない。之が後世に至つて人間が結婚する際に當事者相互が獨占を誓ふ證據として一個の指環を送る風習を來たしたのである。即ち既婚者は自分の欲めてる指環で獨占者の存在を表示することになつたと。

此話の眞偽は別問題として體に面白い比喩であると思つた。殊に最近指環が流行するにつれて、二個以上を嵌めた婦人に會つた時、特に其婦人が未婚者であつた時などには私は嗜飯のおもひが禁ぜられないのである。有夫の婦人が欲めた一個の指環は其人を優美にも高尚にも深床しくも見せるであらうが、二個以上の指環は其人の多氣多情を想はしめて其の品位を害することが多い。幾多の男子に同時に占有されることは決して婦人の誇りでもなく未婚者が既婚者の風を裝ふ必要も更でない。

て用ひられて必ずしも結婚の印でない事を知つて居るがまた一面餘りに濫用されて其結果は若い青年男女の虛榮心を彌が上にも増長させつゝあることを怖れる。もとも

黙せる煙突

久原鑛業會社
鎮南浦製鍊所

神崎 愿

平南線に乗つた人は、レールに沿ふて、ポブラ並木の眞直な道路が何處迄も並んで居るのを見るであらう。汽車は幾度か此道路を横切りて、南へくと走つて行く。そうすると、いつとはなしに大洋のやうな緩い流れの大同江が現はれまた消へると、間もなく線路の兩側に、紅いルビーのやうな華果が重り合つて實つて居る豊園を見かける。此邊から遙か左に、朝鮮には珍らしい高い煙突が、死火山のやうに黙々として天空にそゞり立つて居るのが見える。其處が久原の鎮南浦製鍊所である。

強い風の日には、彼の煙突がゆらくと揺れるやうに思はれる、又實際ゆれるのである。しかし彼は決して倒れる事はない、今にもむく／＼と白い煙を吐き出しさう

と結婚用の指環が平打であつたに反して今日では『ダイヤ』『サハイヤ』といふやうに高價の寶石を鑲めたものが歡迎されて、質實剛健の美風が段々失はれつゝあるは遺憾千萬の極である。

未だ思慮の定まらない青年男女は事物に對して理否辨別の能力に乏しく徒らに雰圍氣に同化され易いから周圍は玆に留意して彼等の善導を忘れてはならぬと思ふ。

にして、昔の事は何んにも知らぬ氣に、黙々として突立つて居る。彼の煙突から、再び昔のやうに勢ひのよい煙の上る日を、今日か明日かと待つて居るのは、決して私一人ではない、平南兩地の人々はもとより、全朝鮮の鑛業家は、皆一様に彼れの復活を望んで居る。

しかし彼れは、依然として沈黙を續けて居る。彼れの足下の丘には幾度か紅い薔薇や、百合や桔梗が咲いては散つた、雲雀の巢からは何度も仔鳥が巢立ちした、けれども彼れは、何んにも知らぬ氣に風雨にさらされながら突立つて居る。

長い白い煙が、風のまに／＼に西に靡き東に流れて、黄金の花だに一樣にそれを期待して居る、だがあの巨人は依然として死せるが如く黙せるが如く突立つて居る。

一位様の思ひ出

旭町一丁目
『銀月』主人

内田竹三郎

◆明治大帝の御生母、中山一位局にも、唐澤山へ御登山あらせられた、御老體の御事として、中々に綿密以上萬般の注意と準備とで、誰しも勿論のことだが、ウチの阿爺（佐野常伯）は、殊に、皇孫と祖先の事に付ては、一意専心、滿腔の敬と禮とを以て、尊崇するので當時唐澤山上、城趾の出丸へ、貴顯紳士の休憩所（宿泊所）を新造した、號して南城館と云ふ、南摩羽峯博士が、茲で、一目十三州、泰山小魯に似たりとて、一名小魯禮とも命名した。

◆山登ること一町程にして、人車は山上迄登攀することが出来る山頂に、大炊の井とて八間四面の井戸があり、如何に山下の里村が早魃で、挿秧の出来ぬ時でも、この井戸の早い事は無いといふ、別にお茶の井戸と云ふのもある、之れは龍宮に通ずるなどと里人は稱して居る。

◆一位局には山上に御一泊の御豫定であるので、新築勿々の事として壁士の乾き如何を氣遣ひ、亦た人車にての御登りに、車體の動搖はどうかと、阿爺自身、車に載つて試した、處が若者四五人がかり、腕つくで、押上げたものだから、餘りに力を入れすぎたため、同じく老體の阿爺は背骨を痛めて、大弱りさせられた。

◆斯ういふ諸般の準備の爲には、吾輩は二度迄唐澤山御所の前の方に御住居あらせられた、一位局の御

殿へ召寄せられて、鐵道、里道

山路、其他を地圖に依つて、御説明申上げた、之れは我輩が唐澤山所在地の生れで、東京遊學迄は草刈にも行けば、お祭りには、神樂の囃子方も勤めたなど、頗る唐澤山との因縁と智識とが、淺からざる爲めである、初めの中は、おすべらかし髪（女官なるべし）四十歳前後の女の方が二三人、我輩は、數居一重の次の間から、奥座敷御正面に御座します、一位局と對ひ合つて、其女の方に順次説明する、御女中が一地圖を持つては、お取次する、斯くて七八回の後には、局様から、こちへとの仰せに、御居間の御前に、出で、詳しく御説明申上げた。

◆小供時代やはり唐澤山へ舊佐賀藩主鍋島直大侯（佐野伯の舊主君）夫妻が登山の際、幣帛料金一萬疋（神社造營の寄附金は一十圓）を納められた、乍、村の古老父兄、この一萬疋の實價を知れるものがない、況んや我輩をや、トニカラ大した高だとのみ、思つて居た、一位局への説明がすんだら支關の次の間に案内せられて、お茶一杯と、御所御用の青笹形の御菓子（餡類）と、金五十疋の奉書包を頂戴した、歸邸後始めて茲に一疋は金貳錢五厘也の眞價を覺へた

◆一位局にも御登山あらせられた芝居で見る、御殿女中の上臈風のおすべらかしの方々七八人其他で二十三人の御一行であつた、無

論御茸狩も遊ばされた、一位局の御満足は云ふ迄もないが、この御殿女中の喜ぶこと、とても筆紙などに形容すべくもない、殊に我輩は御登山に就て二回、局の御殿に罷出でて、説明の任に當つて居つた爲め、其の節は儀式一遍、お使御苦勞に存じ申すお歸りの上は、佐野様によりしく云々だけだつたが、もう唐澤山に登つてからは、このお附女子連から内田さんへ聞かれること間はれること、持てること、所謂引張風の體たらしく村の父兄古老等は、この有様を見て我輩が雲上人にでも取立られた様に、吹聴して廻はつたことである。

◆編輯室漫記

平田久雄

中村巖氏は、田舎に旅行して南京虫に襲はれ、それが大患となつて和田病院に入院、しばらく加療して居たがモウ大丈夫とのこと▲本號には、氏の代りに令妹友子さんの歌を貰つた▲寺尾さんは内地行で本號には休載▲健筆家の新田さんも、金儲けの方が忙しい……▲丁子屋の鈴木さんも、微恙で筆が執れず▲但し飛入りに滿鐵の阪上氏が、名文を寄せたのはうれしい▲來月號の稿として古城梅溪氏の『詩學古事抄録』總督府醫院松岡正男氏の『私の趣味』内田竹三郎氏の『明治大帝の御事』などが來て居る▲飯泉氏の『ゴルフ全國武者修業記』も、十二月號に載せたいと思つて居る▲吉田判事の『大審院と接物』は、伊藤憲郎判事の送られたもので、いつも乍ら氏の御好意には深謝しなければならぬ。

本山翁の意氣

大阪毎日新聞
京城支局

名村寅雄

【三四】

『大毎』では今度現資本金二百五十萬圓を倍額の五百萬圓とするに決定した、それと前後して、大毎東日の東西兩社を通じて六十名の社員が休職又は解雇となつた——社長本山翁は常に曰く『各方面で大陶汰さか大整理とか大袈裟なことをして騒いでゐるが、元來整理といふことは常に怠つてはならない、物停滞すれば必ず腐る、即ち常に清新にすることを心がけて居れば、大掃除など言つて騒ぐ必要はない』とわれ等は、これを至言と思ふ。翁は今次の整理に對して、その告諭第三號に次の如く述べてゐる、私はこれを堂々たる所説と共に、私はこれを堂々たる所説と共に、今や各方面に『整理』を控へてゐるこの地などで革新、整理、陶汰に對する本山翁の所説を紹介するも無益ならずと考へて左に紹介する——これを一讀すると本山翁が新聞——大毎に對して如何にその心血を盡いでゐるかを窺ふことが出来ると共に、大毎成育の上に於ける翁の意氣が如何に壯烈を極めて居るかの一端を窺ひ得て、世上の參考になる點も多くないかと思ふ。

私がこれから申しますことは皆さん同情して聞いて頂きたい、大阪毎日文運の隆盛につれ急進的に發展して来た、東西兩社専用電話の架設、飛行機、傳書鳩の設備、電送寫眞等新たる準備の爲め多額の費用(約六十

萬圓)を要し、又發行紙數激增の爲め高速度輪轉機十六臺、價格百五十七萬圓の資本を投じたる外にグラヴィア二臺、インタータイプ八臺等、總額二百四十餘萬圓を費して其新式と新科學とを應用し完成に進むで居るが一方舊式なる無用の設備を廢し又は過剩の人員を減ずるといふ如き整理的方面に勉めむといふ事に心掛ける人がないやうである。

◆ 本社は本年九月一日拂込を終つて二百五十萬圓の資本金が全額拂込済となつたが尙計算期末には百五十萬圓内外の借入金を含ねばならぬ、萬一貸し人がなかつたら如何する、計算上利益があつても即當も賞與金も分配出来ぬ、兎も角必要なだけの資金は更に進んで用意して置かねばならぬ。私は在職中に度々資本増加を企て近年百二十萬圓の資本を増查して二百五十萬圓としたが更に五百萬圓に増加する必要がある、これは来る十月十日臨時株主總會を開いて決議を見る等である、そこで私の責任は益々重大となつた。實に三十五年前五萬圓の資本が正しく百倍となる譯である。

◆ 私は一昨年本社新築落成後一度社長辭任の意を決したが四圍の事情の爲め當分留任する事となつた、其時の歌に、
置物となるおやちめは何事も見ざる聞かざる小言云はざる
爾來滿一年にして告諭第一號を發し、時勢の進運に伴ひ、内外

事務の繁多複雑に追駈せられ一段の勇氣を鼓舞せざる可からざる境遇に陥り一身を犠牲に供し諸君へも忠告訓誡する處があつた、其時の心事を詠じたるもの小言など云はざる様も命毛にかゝる大事はいはでやむべきそれより自分は小事大事を並べて随分矢筈しく事業に干渉した諸君の今日見らるゝ通り私は莫迦々々しい程多忙である、本社では毎日數十通の書面を見、電話と面會人に忙殺せられ又諸君より重要の事務を開取り、計算書、報告書其他幾多の調印をなし、宅に歸つて特に入込みたる事件を審査考究し、私の袍の中にある社務關係重要書類は實に百通餘を下らず晩寝早起夫れ等を處理せねばならぬのである、洵に瘦馬に重荷であるが近く増資もする後に到つては輕々に辭職する譯には行かぬ、瘦馬でも心血を瀝き腦漿を絞つて遂行を圖らねばならぬ(中略)内閣の緊縮政策は我國現時の状態に緊要切實なるものであるが、私等にとつても非常なる參考となり又訓誡である、諸君も宜敷反省せられたく、我社の如きも採つて以て範となさねばならぬ。他

◆ 鷹 松寺桂陵
山の端にかたむく月を惜みてや
聲もあはれに厲わたるなり

◆ 新聞社が無駄な費用をも厭はず遣ふからとて又自分の金で無いらとて徒に他を眞似て行くが如きは愚の至である。斯く申すのは私の決心で皆さんの同情を仰ぎ各自其局に當つて篤と研究調査し凡て衆智を集めて決定を得たい、それには先づ師團減少に倣ひ本社も組織の改正、經費の節減、業務の簡捷についての實際上の研究調査を願ひたい、今後は何事も果決英斷、能率増進を目的とすへきである。

煙草の話

總督府專賣局長

青木 戒 三

と前記の二傳説からも察知される如く東洋乃至歐洲に於ても其の當初は醫用に供せられしが次第に或は喫き或は嘔みて用ひ漸次現今の如く嗜好物として主に喫用するに至つたのである。

此の喫用の初期に當つて何れの國に於ても一時煙草の喫飲を禁止せる時代のあつたことは興味ある現象である。

歐洲に於ては第十七世紀の頃多數の國家は何れも煙草の使用を禁止した即ち一六三五年佛國は之が販賣を禁止し、獨逸に在りては三十年戰爭の終結以來煙草享樂に對し禁止及刑罰を加へ、ベルンに於ては一六五九年煙草の享樂を姦通罪と等しき刑罰に處し一六七五年には特別の煙草裁判所を設立した、此の裁判所は第十八世紀の半頃迄存在したことは殊に特筆すべき事項である、露國皇帝ミカエル、フェドロヴィッチは煙草喫飲に對して管刑、鼻切及び西比利亞追放等の酷刑を加へ、又土耳其王ムラード四世が煙草喫用者に死刑を科したるが如き最嚴罰の例である。

我が内地に於ては豊太閤時代の落書に、

きかぬものたばこの法度護法度とあるを見ても此の頃既に禁制のあつたことを知り得る、又慶長及元和年間於て再三發布された禁令がある、朝鮮に於ては禁制の有無は判明せざるも今より三百六十年前仁宗王の世大臣趙某が初めて喫煙を試み世の物議を招き或は遂に殺戮せられたりとも云ふに依つて觀るも多少問題の起つた事實のありしが推察される。(續く)

下世話にも『酒は止められるが煙草は止められぬ』と云はるゝ程吾々の日常生活に因縁深き所謂『タバコ』は其の名稱を北米西印度諸島中の煙草産地のタバコ島より得西曆一四九二年コロンブスが亞米利加發見の際、キユバ島の土人が吸煙又は咀嚼する一種の異草を目撃したるを始原として一五一八年歐洲諸國へ傳播したのである。

我が日本内地への傳來は歐洲より約三十年後永祿の末より天正の初即ち西曆一五五〇年乃至一五七五年間である、又朝鮮にも内地と略々同時代に始めて南方より入來したと傳へられて居る、即ち煙草の代名詞たる『南草』の名稱は蓋し此處に基因するのである。

前述の如く歐洲及東洋への傳來年代の間隔少きより見て兎に角煙草の先源はコロンブスが亞米利加探險の結果に發し次で西、葡の商船に依り亞弗利加、亞細亞の沿海寄港地に傳播されたるは明白なる経路である、が煙草の種原に就ては印度に左の如き傳説がある。

往昔とある岩陰に獲物を炙り食慾を充しつゝあつた或る兄弟の面前に何處よりともなく一女入一女神¹が出現した、仍て兄弟は畏敬しつゝ美味なる肉の一塊を捧げたるに女神は大に喜び『妾も亦汝等に何物をか酬いん今

より十三夜にして再び此の處に來り見よ必ず得るところあらん』と言ひ了て忽然と姿を掻き消した、兄弟は約を履み指定の日に同一地點を訪ひたるに女神の右手の位置には玉蜀黍、左手の位置には蠶豆の成熟せるを、又其座したる跡には煙草の繁茂するを發見した。

之が吾人の祖先は素より現在に於ても吾々は山野に獲物なき日にも安じて生命を保持し且身心の慰安を享受し得る所以であると朝鮮にも之に類似せる口碑がある。

昔『ヤンゴク』と云ふ絶世の美人——世人は之を天女とした——があつた、其美人が死んで埋葬された墳墓から一種の奇草——南草¹が發生した、試に之を嘗むれば腹痛は立處に快癒すること眞に神の如くであつた、恰も當時『痒』と名づくる疾病各地に蔓延して頗る猖獗を極め死者算なき有様であつた、で一患者が此の天女の墓に詣り奇草を嘗めたるに輕快を覺えたるを以て之れを持歸り或は嘗め或は煎じ或煙として喫したるに幾干もなく平癒したので遠近之を耳にして巡禮蟬集、採取して各地に歸り之を栽培して藥用とし喫飲に供せるに依つて痒疾其の跡を絶ち奇草の種鬪次第に傳播したるが朝鮮に於ける煙草の由來である。

あわや亭日記

本町五丁目
阿波屋亭主人

岩 本 武 治

十月十二日、快晴

マダ表を掃き水を打たぬうち、壽司の注文来る。——主人も細君もろく／＼顔も洗はないで、注文品の製作に取りかゝる。近ごろにない好況也。——考へて見ると、ウシさうだ、今日は日曜也。御夫婦で、坊ちやに嬢ちゃんづれで、奨忠壇、動物園——などへ御散歩の趣向と見ゆ。少々妬げざるを得ず午後三時半頃洋服男三名来店——初めはビールを注文したが、メートル島ると共に日本酒を喚び、政治を話し行政財政の整理を説く。——効外散歩の歸りらしく見ゆ。——しまいには例の猥談に落ち、何樓の何子がどうの、何亭のお何がどうのと、三時間許りワイ／＼と語る。——二名泥酔す。この時電燈ばつともる。驚て勘定済ませて表に出づ。二名は左せんと言ひ、一名は右せんとだむ、しばらく言ひ争つて居る様子。——言ふ迄もなく左は遊戯道也。——餘計なことながら、こんな連中にも細君はあらう、子供もあらう。——主人うたゝ同情に堪へない。

十月十三日、清夜

空には美しい星が、きら／＼と靜かなる碧落に瞬いて居る。——シンとして少しは寒い。七時半ごろ、長髪の若い男同年配のセルの袴と共に来る。——壽司を注文してバクつき乍ら落ついで語る。——どうやら長髪は美術家

らしく見ゆ、虹原社の作品や、高木背水子の畫品を評し、自信ある口の利きやう也。——但しこれも獨り天狗のだくひかも知れず、いやに生白くつて舌つたるい處、良い筆の持主のやうには見へず——東京通をふり廻し、壽司運をふり廻し、おでん通をふり廻す。——遂にビール一本を倒し、一圓十二錢の勘定を済ませて去る。——入れ違ひに一人の大年増と、二人の若い女来る。すると前の長髪亦たあと戻つて、マツチを借せといひゆる／＼煙草に火を點じつゝ、鼻毛をのばして若い女を凝視する。——自稱美術家らしい氣障さ加減に主人少々參る——。

十月十四日、晴

午後の二時半頃、しやうばいらしい女三人来る。きやつ／＼と騒ぎながら間斷なく喰ふ。スーさんとか、イーさんとかいふ言葉多し。多分男の頭字なる可くそれに依れば甲の女は、滿洲の男にも、吳服屋の番頭にも、金物屋の店員にも多少つゝ御座つて居るものらしく、傍輩の他の二人にも果して甲がそれを最愛せるや不明にて、今推問をうけつゝある容子也。『わちきなんか誰れかヒトリにきめるわ、たよりないねえあんたわ』と分厚の手で甲を突く。『だつてシーさんは親切だけれど滅多に來ないし、フーさんは男振り

は好いが、氣が知れないしね。わたいも何うしていいか判らないわ』など、臆面もなく猥俗な話を二時間ばかりす。結局三人で出し合せて、二圓八十何錢の勘定を済ませ『見さんさいなら……』

十月十五日、晴

電燈ともる頃、夫婦づれの客人來男は人生の行路難につかれたらしく頭上殆ど白霜也、歳五十五六。細君は大柄な女にてマダ四十に間のありさう。——借家捜しの歸りと見へ、男は並木町の二十三圓の家にぎめやうといひ、女は『私は櫻井町の氣に入つたわ』といふ『けれどもアレは二十八圓でないか、それに水道と電燈もこつち持ちだ』と男節約を説く。遂に衝突となりて女ブ／＼す。男頻りに時利あらざることを説き、女をなだむ。女涙聲となつて『私の著作だつて四月に入れたツ切り……』とエライことになる。男窘甚し——主人板場に在つて、熱々之を聴き、時勢の日に非なるを思ふ。いたく男に同情せざるを得ず。

◆青々園主人

吉 田 莊 一

本町青々園が『特許ストーブ』を賣出して居る。本社でも使つて居るが頗る體裁が好くて、火力は強い逆も從來のものと比べものにならない。主人倉田サン氣焰を揚げて曰く『始めは誰れでも青々園主人にだまされたと思つて買ふ、が使つて見ると宣傳以上なので、忽ち感服する……』と▲全く其通りだ宜しく全鮮に活躍して、大成金となる可し——そして本社の社屋でも建立して貰ひたい——。

京城昔話

山口 太兵衛

衛生の施設としては是れ又頗る困難をしたもので、當時古城君が公使館の囑託醫として在留して居たのであつたが、同君が其の任期が満了したので或は他へ轉住して終ひはせぬかと云ふ心配から、同君の引止策として大に奔走し、居留有志から月々二十五圓を集め、各國の公使及領事團から廿五圓、合計五十圓の補助金を出すことにして京城で開業して貰ふ事になつたのである。

學校はと云へば之も亦頗る妙なもので、當時は壯年者許りで獨身者とか或は子供のいないものが多かつたが、偶々子供を持つて居る人達は誠に失禮な申分ではあるが比較的下級の人々で教育費など云ふことは思ひもよらぬ次第であつたそれでも教育と云ふ問題はどうしても等閑に出来ない事柄なので私には方々の子持ちの家へ頼み廻つて漸く十一人の子供を借りて来て、之を商業會議所の一問半の温泉の一部に收容して普通教育を授ける方法を講じたのであるが、別に教科書もなく亦販賣して居るところ等もないので、仁川から小學讀本を二册借りて来て、それを普通の半紙に一々透寫しをして、文字から挿書まで、本と少しも變らぬものを拵へて子供等に與へ、讀書、算術、習字と云ふやうな事を教へる事にして、商業會議所の書記、大

浦昇と云ふ人に手傳を頼んで毎日午後三時間宛つ教育して居た、ところへ前郵便會社の社員で當時浪人をして居る須田龍藏と云ふ人がぶらりと私をたよつて来た、須田君は中學を卒業して檢定證書も取つて居るので、此時幸ひ總代役所書記の笠井甫と云ふ人が歸國辭退したので其の代りに須田を用ひ、月十圓の手當を出し、同君に學校の方を手傳つて貰つて約一年ばかり續いた。

其頃最早仁川には東本願寺の別院があつて布教をして居たのであるがまだ京城には人口も少ない別院を設ける實力とてはなかつたのであつたけれども、此別院に打合せ本山に交渉して京城支院を設けることに頼んだが、前にも申す通り人が少いので、京城ではお寺が立つて行けないと云ふ状態なのでそこで思ひついたのは、お寺の方の事は有志で何とか不自由のないだけの事は引受けて保障をする、其代り子供の教育をばさんにして貰ふと云ふ交換条件附で東本願寺の別院の支院を京城に引受けたのである、本願寺支院の方には井門の處の舊校所を充て、總代役所は新築に引移ることとなり赤松隱惠と云ふ人を、支院の主任として兼學校教師として迎へて兒童の教育はお寺の方へ委任した。斯ふ風でデリ／＼發展しかけて在

留民も殆ど二百名近くに殖へたのである、それでもう少々暴動位起つても大丈夫であると云つて、みんな非常に喜んで居つたものであつた。

一方居留民會も商業會議も擴張の機運を迎へて、只今の浦尾旅館の突當りへ廳舎を新築する事にして經費一千八百圓で、ペンキ塗りで當時としては立派なものが出来上り、此れに居留民會と商業會議が移轉したが、此の廳舎には事務室の外に疊二十八枚を敷き得る室があると云ふので、京城に於ける大建物の一として評判になつたもので、總べての集會は此所で行ふことになつて恰度只今で言へば公會堂のやうに利用されたのである。二十二年には旅館兼料亭なりし西洋亭(壽町)を金二百七十五圓で求め寺を移すこととなり、有志にて此金を工面した、之れで五百八十坪餘の土地と朝鮮家五十四間の瓦家とを所有する事に成つた。此年避病院も有志の寄附で古家を買入れ今の警務局の地内に設けたのである。學校の方も次第に小供が殖へて赤松君一人では遣り切れなくなつたので、廿二年には赤松君の親戚にあたる教員資格を有する人でやはり僧侶で橋圓壽君を招聘した、無論本職は坊さんの方の手傳で副業に子供の教育をする事なので、而かも赤松君と橋君も『無報酬』で居留民の爲めに盡して呉れたのである、(橋君はその後に韓國顧問部の補佐官となり韓語に熟し現在青葉町に住んで居る)我が京城に於ける最初の教育界功勞者として大に現住民は敬意を表し且つ表彰しなければならぬと思はれる。

此時面白いのは學校の方も斯様に

で露出に伴ふ藏入の方法も確定し

そして明治三十六年頃には三萬六

此時面白いのは學校の方も斯様に盛んになつて來たので、小使を一人置かねばならぬと云ふことになつたが、先生でさへ無報酬なので無論充分の給料を出して雇ふことは出来ない。そこで居留民會と商業議會が新築へ移轉して舊廳舎の四圓と三圓の家賃が不要になつたのを小使の俸給として渡し尙其の學校即ちお寺へ住み込み、寺男もカケ持ちで、食料の方はお寺の臺所からと云ふので一人雇ふことにした。それでポツ／＼準備は出來たが今度は大事の學校の道具が足りない、購入しやうには金はないのだからどうすることも出來ないところへ、恰度と言つては誠に濟まないが、中村君の最初の子供(釜山で生れた)が死んで終つた、當時同君を説いて金一百圓也の寄附を願ひ、外有志より三圓五圓と頼み廻つて學校用の椅子と机一組五圓を二十組購入して四十人分の座席が出來、附屬用度もあらかた出來たのである。

其後此の机や椅子は、新築の居留民會廳舎で集會のあるたび又は新年や天長節の祝賀宴會等にも盛んに利用されたものであつた。斯の如く萬事がそれ／＼形を備へて來るに連れて居留民會の經費も益々膨脹して來るので居留民會でも愈々本式に豫算を組んで仕事をしやうと云ふ事になつて、第一番に計上された明治二十二年度の總豫算は一千八百七十圓で、二十三年度が消防費其他臨時費を加へて二千百餘圓で、二十四年は其儘で二十五年には二千七百圓餘の豫算であつた、最初豫算を組むやうになつた時のことである外務省から居留地に於ける警察費を幾分かの負擔を命ぜられた、それや是れや

で露出に伴ふ歳入の方法も確定しやうと云ふので、從來の分頭金の外二十錢、三十錢、四十錢、五十錢、一圓と各等級を區分して賦課するやうに決めた。

將 棋 道 樂

辯 護 士 高 橋 章 之 助

私は時事の問題に就ても常に之を社會教化と云ふ方面から非常な興味を以て研究して居るのである、と同時に趣味としては、義太夫と將棋を好んで居りますが、やはり之を社會教化と云ふ方面に用ひ度ひと思つて居ます。

假令は義太夫の中にある人物の人格を説く中に、音聲により身振りにより或は手眞似、表情によつて勸善懲惡を、最も明瞭に説明すると云ふのが私の目的であります。

將棋にしても唯一人の王様を守護する爲めに、飛將角將金銀桂香步兵と云ふ將校から雜兵に至るまで何れも劣らず自ら進んで危地に就き深く戦死を遂げ王様の安全を計ると云ふところに、我國の武士道の精神を最も判り易く表顯してあるので、現在の世態や思想等と結び付けて考へるとき私は將棋の勝敗など忘れて一種云ふべからざる感興が湧くのであります。

私は斯ふ云ふ考からして此の義太夫なり將棋なりを單なる娯樂のみせず直ちに社會教化の方便として大に奨勵したいものだと思ふのであります。

それで私は此の社會教化と云ふ事に就て既に十年も研究を續けて

そして明治三十六年頃には三萬六千圓の豫算となり三十七年には五萬圓、三十八年に七萬圓と云ふやうに漸次膨脹して現在の大京城市……京城府となつたのである。

居ると同時に、義太夫もやれば將棋の如きは土曜日曜と暇ある毎に行つて居るのであるが、以上の趣旨からして其の技藝の優劣とか勝敗とかは最初から眼中に置かないで、其の剌那／＼の氣分を味ふて居るのであります。

故に何時まで経つても一向上達せず相も變らぬ／＼で満足して居る譯であります。

◆岩間氏の事

前 原 旭 川

大陸ゴムの事務岩間亮氏は、何時行つても取次の者と共に頭にゴムの粉をかぶつて出て來る、譯を聞くと『仲々君今頃の職工は口ばかりでは働かんよ』▲氏は自ら工場に這入つて、職工と共に働いて居るのである▲現在同社が全鮮第一の好績を示して居るのは、地方の販賣店は大低株主たる事、即ち自分の製品を自分で賣つて行くといふ處にあるらしい▲が、岩間氏の斯うした力行奮闘に待つ所も多いらしい▲いづれにしても珍らしい重役だ▲重役のあたまたまにゴムの粉がいつばいだ。

讀史漫筆

永樂町人

[80]

に過ぎない。

● 權現様は、やはり權現様である。色好みに於ても、創業將軍の威風がある。

● 老ひて駿府に隱居してからでも、凡そ八九人の妾があつた。

● お萬、お愛、お勝、お勢——盛んに君寵を争ふたのは、いふ迄もない。

● が何しろズルさに於て古今第一等の御隠居である。

● あつちにも好いやうに——こつちにも好いやうに——腰麻糰糊、遂に女豪連を御了した。

● 就中お愛などは、その十三の時から眷寵いたといふ——好みの變態的なる、やはり偉人の資格はある。

● 秀忠は、駿府に大御所の起居を問ふた——。

● 逗留十餘日に及んだので、將軍も寂しがる可しとして、家康は一夜美少婦（侍女）に菓子を持たせ、秀忠の臥房に送つた。

● 處が秀忠は、嚴君よりの御使者と聞き、かつぱと跳ね起き、衣裳を整へ、遙にまかり下つて、『御役目御大儀に候』と頭を下げた。侍女は啞然とした。

● 以て平生のお江與の訓練のきびしさが思はれる。——彼れは可愛さうなほど、女房に畏服して居た。

● 右の次第を大御所が聞き『さてさて將軍の堅いのにも困つたものなり』と浩嘆した。

● これはお江與の女權を慨嘆したものと見ていふ。

● 要するに、お江與の壓倒力は遙に姉の茶々（淀殿）に勝つたのは事實である。

● 秀忠に猥褻なき所以である。

● 千代田城は、一時お江與の方の手中に在つた——。

● それと對抗した女性は、例の春日の局（お福）である。

● この二人の争ひは、竹千代、國千代の相續争ひとして陽現した——！

● 本多正純が、春日局の大きい聲を尻押する。土井利勝がお江與とんの、お興を擔ぐ。割つて見れば『世にありふれたお家騒動』である

● 下らぬ男は、三代家光である。

● 彼れは四十になる迄、春日の局の懐つ兒であつた。

● 彼れの女房（房子）は、鷹司攝政家から迎へたが、それはお局の氣に入らず、一生中ノ丸に遠ざけられた。

● 家光は、呆然として指を喰へて見物した。

● そして與へられたお滿や、お幸の醜骸を抱いて甘心した——。

● 家光は少年時代、却々異性を與へられぬので、小姓共を寵幸した。

● 處が今度は、『お世嗣ぎ』が心配になつて、續々美女を與へられた。

● だが男色癖は容易に矯正出來ず、これにはお局様も、少々手古摺つたと言はれる。——こんな風に家

● 光は、春日の局の『金の鳥籠』に飼はれた小鳥であつた。

● 彼れを英邁といふは、史家の俚筆

● 家康のやうな用心堅固な男が、他から女房を寢取られたのは、一期の不覺とでも言はうか——。上手の手から水が漏る——。頗る皮肉な話だと思ふ。

● 家康の糟糠の妻？築山殿は、支敬といふ鍼醫と姦通した——。支敬は支那人であると言はれて居る。

● 朝倉義景は、當時の好色大名の隨一である。

● 築山殿は、家康から追はれた後、一漂泊して義景に依つた——。

● 狒々公の喜び知る可しである。だが流石の義景も、築山殿の濃厚には呆れ果て、三月にして之を城外に逐ふたは、この女能くくの精力家と見へる。

● 築山殿の子が結城秀康で、秀康の子が例の越前忠直である。

● だから忠直が『婢にして虐』だつたことは、依る處があるのである——間違傳である。

● 淀君と、秀忠の室お江與とは姉妹である。

● 淀君は歴史に唄はれる程『悍婦』でなく、お江與は人の知る以上に

● 『妬婦』である。

● だから氣の弱い二代公（秀忠）は一生嫌ア天下で、閉居した——。

京 城 雜 筆

編輯後記

吉田 莊 一

◆毎號十名位づゝ、新手の寄稿家を加へて行かうと思ふが、なかなか困難である。

◆中には『君のところも大變であらう、宜しい何か書く……』と受け合つてくれる頼母しい先輩もあるが、タマには原稿を書くことを何か俗悪な仕事でもあるやうに暗に輕蔑するわからず屋もある。だからこの仕事もながくやさしくない。

◆次の十二月號は、この十三日頃原稿を締切り、十二月一日に發刊し、尙正月號は本月(十一月)三十日締切り、同じく正月元旦讀者の御手許に届けたいと思ふ、随つて寄稿家には、特別の御勉強を願はねばならぬ。

◆自分は名文が書けぬからとして、謝絶される向があるが、本誌は文學雜誌でないから、何も名文たることは要らぬ——生活實感、職業實感などを書くとしても、あけすけに、露骨に、むき出しに書いた方がいゝ、本誌は紅やお自粉は要求しない。——この意味でどなたでも本誌には筆を執り得るのである。——どうか尻ごみしないやうに願ふ。

◆飛び入りに、いゝ原稿が来るほど、うれしいことはない。本誌の結城氏の稿、阪上氏の稿——などどんなに記者を狂喜させたであらう。——讀者の中心ある方はどうか御頼みなくとも奮つて御援助を乞ふ。

◆玉稿は、能ふ限り十五字詰、百十行以内に願ふ。

大正十三年十一月八日印刷
大正十三年十一月十日發行

一部定價金四十五錢

發行兼 松本 武正
編輯人 前原 登久雄
印刷所 京城日報社
京城府和泉町一六四
發行所 京城雜筆社
電話光化門三〇六番

辯護士 榎本 隆

京城明治町二

大 阪 毎 日 新 聞

市 内 蓬 萊 町 一

京 城 支 局

電 話 本 局 三 〇 六 〇 五 七 番

金 白 銀 金

地金/御用ハ
京城明治町
徳力本店出張所
電本二〇八八

細工の御用は
本町 徳力へ
電本三九三九
京 徳 城

官製食卓鹽

朝鮮總督府專賣局製造の本品は理想的經濟的の調味料で文化生活に缺くべからざるものであります
徳用大瓶小瓶振出瓶等數種の美しい瓶入で價格低廉です是非御使用願ひます

京城府南大門通二丁目九七

發賣元 富田商會

長電話本局三三〇九番
振替京城四五六八番

秋物背廣服
同オリーブ
レインコート

新地質續々着荷

仕立念入り價格は安い

經濟的理想の既製品頗る豊富

▲御注文に應じ特製仕候

京城 鍾路一ノ一九

角田洋服店

電話光化門九五五番
振替京城一八四三番

朝鮮商業銀行

頭取 和田 一郎

標

時計や

指輪の

御注文は

是非とも

村木へ

時

京 城

村木時計店

正確なる
タイム・オブ・ザ・デイ
の主持

電話本局四七一

計

準

向上靴

紳士向
學生向
女學生向

各種

向上靴は彼の有名な教化事業向上會館産業部の製品
で御座います、事業の性質から『正しき製作』と
『正しき材料』とに依つて作られ、之に『正しき價
格』を付して賣られて居ります、何卒御試用の上御
批判を給はり度存じます

京城南大門通り

向上靴
一手販賣店

丁子屋洋服店

電話本局

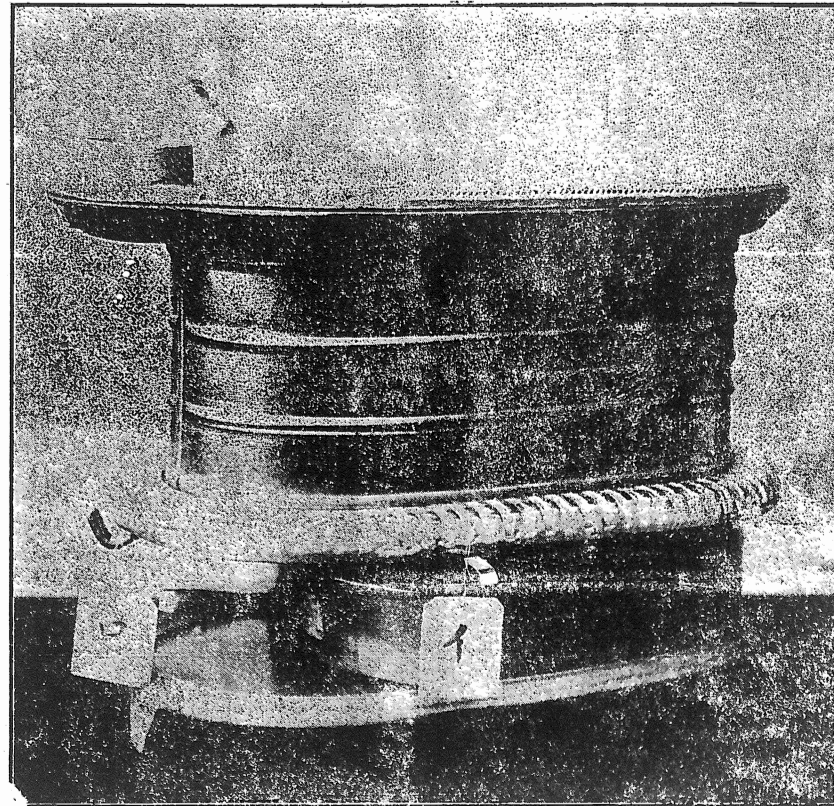
長二四六
三二二九
三〇九〇番

休日なし 毎日夜九時迄營業——御用の際は店內タツ部御呼出被下度候

何でも改造文化生活の高潮さるゝ現代に
 生れたる革命的暖房器!! 何??
富永式特許ストーブ

五大特色

- 一、燃料の一大節約
- 一、灰塵飛散の患なし
- 一、火災を起すの慮れなし
- 一、煙突掃除は繰返すの要無し



高さ 一尺一寸
 縦 一尺一寸
 横 一尺一寸
 大サ

定價

二ノ號 拾七圓
 一ノ號 拾五圓
 (通の眞寫)

特長は誇張のない所を擧げて居ます昨多より御試用を願つた各方面の名士より此特長を裏書された御批評も頂いて居ますが余白の都合で乍遺憾掲載出来ません兎に角本町御散策の御序に現物御覧を願上ます

特約店
 東京本町一丁目 橋口金物店
 電話本局四二番
 同 二丁目 青々園茶舗
 電話本局二二二番
 同 一丁目 特許暖爐組合假事務所
 電話本局一三四番

端書で御申込次第型録お送りいたします

向上靴

紳士向
學生向
女學生向
各種

向上靴は彼の有名な教化事業向上會館産業部の製品
で御座います、事業の性質から『正しき製作』と
『正しき材料』とに依つて作られ、之に『正しき價
格』を付して賣られて居ります、何卒御試用の上御
批判を給はり度存じます

京城南大門通り

向上靴
一手販賣店
丁子屋洋服店

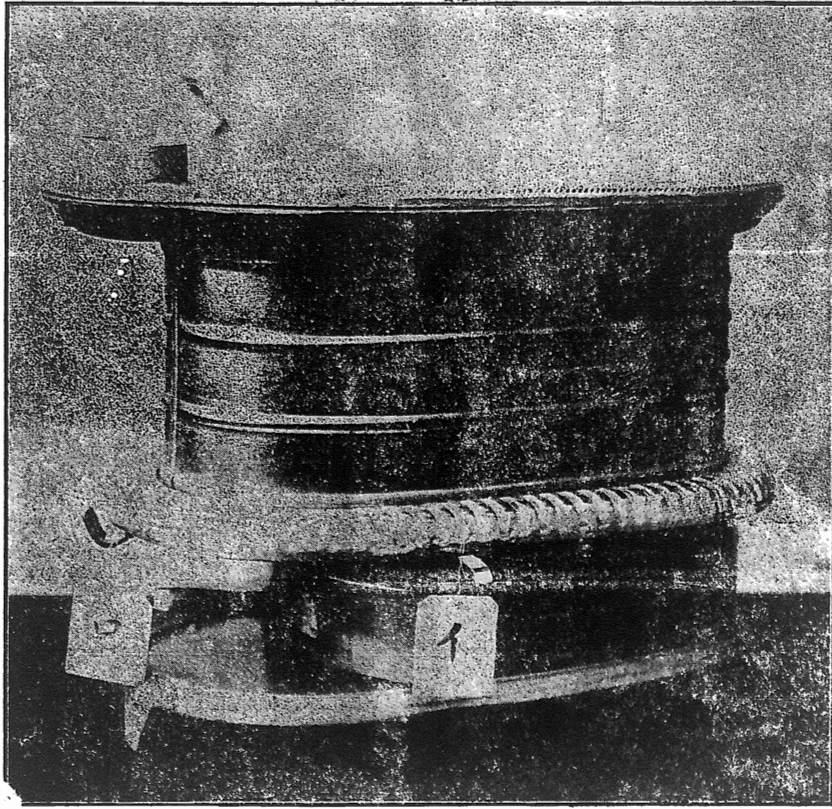
電話本局
長二四六
三三三九
三〇九番

休日なし 毎日夜九時迄營業——御用の際は店內々部御呼出被下度候

何でも改造文化生活の高潮さるゝ現代に
 生れたる革命的暖房器!!何??
富永式特許ストーブ

五大特色

- 一、燃料の一大節約
- 一、灰塵飛散の患なし
- 一、火災を起すの虞れなし
- 一、煙突掃除は繰返すの要無し



高 一 尺 三 寸
 縦 一 尺 一 寸
 横 一 尺 一 寸 } 大

價 定

二ノ號 拾七圓 (寫眞の通)
 二ノ號 拾五圓

特長は誇張のない所を擧げて居ます昨冬より御試用を願つた各方面の名
 士より此特長を裏書された御批評も頂いて居ますが余白の都合で乍遺憾
 掲載出来ません兎に角本町御散策の御序に現物御覧を願上ます

特約店
 京城本町二丁目 橋口 金物店
 電話本局四二番
 同 二丁目 青々園茶舗
 電話本局一一二番
 同 二丁目 特許暖爐組合假事務所
 電話本局一三四番

端書で御申込次第型録お送りいたします

◎銘仙と

毛糸◎



京城本町
あぶらや

堀内満輔

電話本局 八五五
九〇〇
〇六五
番番番

◎多少に拘らず御用命
の程を願ひ上げます